

---

**遊戯王GX** -the ultimate crisis-

葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX - the ultimate crisis -

### 【Nコード】

N3339W

### 【作者名】

葉月

### 【あらすじ】

- 朝、目を覚ますとそこは、異世界でした 平凡極まりない青年の日常は、突如として終わりを迎えた。転生した覚えも、トリップする理由も無い青年が飛ばされたのは、遊戯王GXの世界。しかしそこには、在る筈のない物と、居る筈のない者がいて!?!? シンクロモンスター、だと……!?!? 5D'sのメンバーに、原作にはいない筈の少女まで出てくるという訳のわからない状況の中、青年は静かに決意する。「よし、逃げよう」「イヤ、逃がさないからね!?!? キミ、主人公でしょ!?!?」迫りくる危機に青年はどうする

のか？ はたして青年をこの世界に飛ばした者の正体とは！？ というか、こんな主人公で大丈夫なのか！？ 「大丈夫じゃない、問題だ」「自分で言っちゃった！？」 ちなみに小説初投稿です。読みにくい文章ですが、生温かい目でみてやってください。楽しんでいただければ幸いです。

くプロローグく 青天の霹靂！？ 最初から詰みゲー！（前書き）

はじめまして、作者の葉月といます。この作品は、大まかな流れは原作通りですが、確実にオリジナル要素が入ってきます。また、オリカも出るかもしれませんが。なので、そういったモノに嫌悪感を抱く方には、お勧めしません。平気だという方は、楽しんでいただければ幸いです。初投稿なので、至らないところがたくさんあると思います。生温かい目で見守ってやってください。

くプロローグく 青天の霹靂！？ 最初から詰みゲー！

「……落ち着け、落ち着くんだ俺。とにかく考えろ、命令だ、M  
Y脳……！」

なぜこんなことになったのか、全神経を集中して状況を整理しろ  
！ 大丈夫、真実はいつも一つだ！

「……よし、まず昨日の行動を振り返ろう」

OK、クールになれ俺よ。記憶している限りではいつものように  
友達と遊んだ後、家に帰って晩飯を食べ、風呂に入り、暇だからデ  
ッキを調整して寝たはず。

そう、吃驚するほどいつも通りの一日だったはずだ。変わった点  
など何もない日常で、ましてやこんな状況を招くような切欠などな  
にもなかった。

だというのに今、俺の置かれている状況は

「……デュエルアカデミア受験会場、だと……！？」

いつも通りの日常からは、全力で逆走しているようだった。

「まさか、朝目覚めたら異世界に飛ばされているとは……」

小説等ではよく見る状況だが、自分に降りかかるとは夢にも思っ  
ていなかった。

断っておくが、俺は元の世界では断じて死んでなどいない。故に、異世界に転生という状況はありえないはずだ。

となるとこれは、異世界トリップというやつだろうか？　しかし

……

「なんで、俺が……？」

元の世界では平凡極まる俺が、よりもよって異世界トリップだと？

ありえない、と理性がそれを否定する。

けれど同時に、目に映るすべてが

右手に握られていた『112番』と書かれた受験票が、

いつのまにか左手につけられていたデュエルディスクの重みが、テレビの中で見ただけのことのなかったキャラクターたちの姿が、目の前で繰り広げられる、ソリッドヴィジョンを使ったデュエルの迫力が、

・この世界が遊戯王GXの世界だと、どうしようもなく証明していた。

「くっそ、アタマン中がメチャクチャだぜ……」

なぜこんなことに、どうやって元の世界に帰ればいいのか、そんな考えが頭の中を廻っている。

「こんな、わけのわからない状況……」

……いや違う、それは建前だ。たしかに混乱はしているし、「帰りたい」という思いも、ある。

だが、それ以上に俺は

「……ワクワクするじゃねえか……！」

この状況を楽しんでいた。

困ったことに俺という人間は、普段ネガティブなのに逆境になると開き直ってポジティブになってしまう。

ただでさえそんな性格だというのに、トリップした場所は元の世界でも大好きだった遊戯王の世界。テンション上げるな、というほうが無理というものだ。

「ヤバイな、マジで十代達に会えるのか……！」

- そう、俺はこのとき確かに浮かれていた

「しかし、元の世界とは俺の外見が違うな……こっちでの年齢に合わせてあるのか？」

- だから、だろうか

「喰らえ！スカイスクレイパーシュート！」

「マンマミ〜ヤア！ワタクシ〜の古代の機械巨人が〜！」

- 冷静に考えれば、最初に気づいてもいいはずだったのに

「ん？ 今、聞き覚えのあるやり取りがきこえたような？」

ここの受験は受験番号が大きい順、つまりは筆記の成績が悪かった奴から試験が行われることに

「アレ？ そういや、俺の受験番号って……？」

『110番』の遊城十代は、あくまで特例措置で最後に試験を受けさせてもらっただけであることに

つまり

『それでは、本日の日程はすべて終了しました。受験生のみなさんは気をつけてお帰りに』

受験番号『112番』の俺の試験なんてものは、とっくに飛ばされていたのだった



くプロローグく 青天の霹靂！？ 最初から詰みゲー！（後書き）

ハイ、プロローグでした。まだ主人公の名前すら出ていませんね……。これほど自分に文才がなかったことに驚きです。

次回は主人公の初デュエルとヒロインの登場です。

次も見えていただけるとうれしいです。それでは、葉月でした。

**第1話 七難八苦！ 俺と試験と謎の美少女（前書き）**

遅くなって申し訳ありません！ まさかこんなにかかるとは……  
自分でもビックリだ……。

そんなわけで第1話、ようやく始まります。

第1話 七難八苦！俺と試験と謎の美少女

「全員そこを動くなあつっ！！」

場内に一人の男の絶叫が響き渡った。

試験終了の場内アナウンスを聞き、帰り支度を始めていた者たちが硬直する。

その、突然の事態に誰もが

クロノスモ

丸藤翔も

三沢大地も

万丈目準も

丸藤亮も

天上院明日香も

そして、試験を終えたばかりの遊城十代も

呆然と立ち尽くしていた。

しかし、何事にも例外というのは存在するわけで。

皆が硬直している中、観客席には別段動揺した様子のない四人の人影があった。

一人は、額と両頬に特徴的な印 刺青だろうか がある、鋭いな  
がらもどこか親しみやすそうな青年。

一人は、尊大な態度の中に、ある種の威厳を感じさせる金髪の青  
年。

一人は、赤い髪と整ったスタイルに、綺麗なネコ目をした少女。

一人は、特徴的な髪形と左頬の刺青が目を引き、強い意志の中  
に優しさを秘めた目を持つ青年。

こんな混乱した状況だというのに、彼らはこんな会話を繰り広げ  
ていた。

「オイオイ、こりゃ一体どうなってんだ？」

「フンッ！ 俺が知るわけがなからう」

「学生服は着ていないようだけど、見た感じ受験生かしら……ど  
う思う、？」

「今のところは何とも言えないが……おそらく問題はないだろう」

「ん？ そりゃどういことだ ？」

「そうだぞ、！ どう考えても怪しい奴ではないか！」

「いや、あくまでなんとなくだが……俺には、奴がずいぶんテ  
ンパっているように見える」

「……テンパってる？」「」

「ああ、それに……イマイチ悪人には見えなくてな。

まあ、もし奴がここの人たちに危害を加えるそぶりを見せたら、

そのときに動けばいいだろう」

「 がそういうのなら、わたしはかまわないけれど……」

「ま、たしかにアイツが動いてからでも問題ねえな」

「フン……ならば、もうしばらく様子を見てやるとしよう」

金髪の青年がそう言って、会話を打ち切る。

幸いというべきか、明らかに場馴れした様子の四人の会話に気づいた者はいないようだった。

例外、と。

この四人は、まさしくそう呼ばれる者たちだ。それも、二つの意味で。

ひとつは、こんな状況でも全く動じていないという、受験生とは思えないその態度が。

もうひとつは、本来ならばここにいる筈がない存在、という意味での例外。

けれど、彼らがここに居ることに違和感を持っている人間は、まだいない。

そして、もう一人 正確にはあと一人いるのだが

この会場には、彼らとは別の意味で例外と呼ぶべき人間がいた。

それは、観客席に座っている一人の 制服を着ている以上、受験生であろう 少女。

その少女は彼ら四人のように場馴れした様子はなく、明らかにこの事態に動揺している。

ただし

その理由は、ほかの受験生とは全く異なるものだった。

「そんな、原作にない展開……！？　もしかしたらあの人も……？」

少女の呟きは、誰にも届くことなく宙へと消えた

時は少し遡る

それは、試験終了を告げる場内アナウンスが流れ終わる直前の、観客席にて。

そこにいたのは、一見すると冷静としか思えない姿の少年。どっしりと構えたその姿は、見た者をたじろがせる迫力に満ちている。

そのためか、少年の周りにはほとんど受験生がいなかった。

だがもしも、近くでこの少年を見れば気づいただろう。

石像のように固まったその顔に、尋常じゃない冷や汗が流れているように。



らしいな……見つけ次第殴ろう、出来るだけ強めに。

……って、そんなことを考えてる場合じゃねえ！ どうする、このままじゃGXの世界に来たのにアカデミアに入れませんでした、なんて笑い話にもならねえ事態になるぞ！？ なにかいい方法はなにか！？)

さて、この少年。

普段は割と冷静　悪く言えば若干ネガティブ　なのだが、逆境になると開き直ってポジティブになるという性分である。

そんな性分をしたこの少年が、どうにかして試験を受けようとした結果、彼はひとつの方法を思いついた。

おそらく、普段の少年ならば絶対に実行しないであろう方法。

しかし、現在の状況は逆境。

そうして、少々ハイになった少年のとった行動は

「全員そこを動かすなあっ！！！」

これであつたわけで。

結論としていうのならば、少年は　この場にいた最後の例外はやはり馬鹿だった。

再び、時は現在へと戻る

誰もが　若干の例外を除き　硬直しているなか、最初に声を



あげたのは意外なことにクロノスだった。

「な、なんでス〜ノ!? アナタはいつたい何者なノーネ!!!」

真つ先に硬直から抜け出せたあたりは、さすが教師というべきだろうか。

そして、クロノスが叫んだのを皮切りに、会場内の人間も徐々に硬直が解けていった。

同時に「何者だ、アイツ?」「テロリストっス、そうにきまつてるツスー!?!」「すっげー、ドラマみたいだぜ!!!」など、さまざままな声が会場を満たしていき、皆の注意は少年へと集まっていく。

そして、会場内にいる全員の視線が少年に集まる中。満足そうに頷いた少年は、クロノスの問いに答えた。

「俺は ！」

高らかに

「受験番号1112番 ！」

威厳をもって

「俺の要求は ！」

少年は

「 試験を受けさせてくださいお願いします!!!」

光の速さで、土下座した。

ちなみに、固唾をのんで状況を見ていた場内の全員から、少年の土下座を見た直後

「「「「いや、受験生かよっ!?!」「」「」」」」

というツッコミが入ったのは、いうまでもない。

数分後

「フム、事情はわかったノネ」

とりあえず、会場内を騒がせたことについて全力で謝罪した少年は、こんなことをしでかした理由を説明していた。

「しかし、交通機関の遅れで遅刻したのならば、最初からそう言っただけいいノネ……おかげで寿命が縮むとこでスネ」

「いやスイマセン、ほんとスイマセン、マジスイマセン」

当然ながら、本当の事情は話していない。もしもこの場で「目が覚めたらこの世界に飛ばされていて、しかも飛ばされた時間のせいで試験に間に合わなかったんですよ」などと言ったなら、少年には狂った電波野郎という称号が与えられ、アカデミア入学は絶望的であろう。

「で、試験は受けさせてもらえるんですかね？」

なので、遅れた理由に関しては十代と同じ交通機関の遅れということにしておいた。この理由ならば、十代が試験を受けられた以上、自分が受けられないということはないだろう、と思っただからだ。

「じゃああんなことせずに、最初からそう説明してればよかったんじゃない？」というツツコミは黙殺させていただく。しいて言うなら、インパクトって大事じゃね？ とだけ言わせてもらおう。

「まあ、あんなことをしたとはいえ事情が事情でス〜ノ。」

よって、特別に今から試験を開始するので中央のデュエル場に下りるりてくるノ〜ネ」

「ういっす！！ あざっす！！！」

かくして

紆余曲折はあったものの、ようやく少年は試験を受けられることになったのだった。

「おい、 112番！！！」

「ん……?」

デュエル場へ下りていく途中で、元気のいい声が聞こえてた。

一瞬、誰を呼んでいるか判らなかったが「ああ、そっいや112番って俺のことか」と気づき、声のしたほうへと振り返る。

どうもさっきので目立ちすぎたせいか、視線やらヒソヒソ話やらはチラホラ聞こえてきていた。が、まさか真つ向から話しかけてくる奴がいるとは思っていなかったな。

さて、いったいどのモノ好き……が……!?

「お前は……さっきのHERO使いの110番?」

「お! さっきのデュエル見てくれたのかよ!」

おおおおおおおい!! 主人公かよ、話しかけてきたのがよりによって主人公かよ!

すげえ、俺今遊城十代と会話してるぜ! やべえ、テンション上がる!

とはいえ、いきなりハイテンションになるのもマズイので、表面上は努めて冷静に会話を進める。

「ああ……まさか、実技指導の最高責任者に勝つとは思っていなかった。いいデュエルだったな」

ん? お前デュエル見てなかったんじゃないのかよって?

いや、原作で内容知ってるからさ。

「へへ、サンキューな！！　つと、そういやまだ名前も言っていなかったな。俺は遊城十代！　お前は？」

「俺は　」

『受験番号112番、早く来るノ〜ネ！』

つと、悠長に話してたら呼び出しされちゃった。

もうちよつと話してみたいところだったが、ここでクロノスの怒りを買って試験を受けられなくなるのもマズイ。

少々残念だが、俺は十代との会話を切り上げることにした。

「悪いな、どうやら急がないとマズイらしい」

「そっか、がんばれよ！　お前面白いやつみたいだからさ、いっしょにアカデミアに入ろうぜ！」

にかっ、と笑って十代がそう言うてくる。

こいつ、本当にいい奴だな……。あんな真似した奴（俺のことだが）に面白いつて言うてくれるなんて。普通だったら怪しいやつと思われるか、変なやつだと思ってドン引きされるぜ。

「ああ。俺も、アカデミアに入れるように頑張るとしよう」

「おう！　そんじゃ、面白いデュエル期待してるぜ！　つて、そっついで前のお前の名前は　」

つと、そっついでまだ教えてなかったか。

「如月 獅音だ。忘れるなよ？」

「へへ、友達の名前を忘れるかよ！」

会ったばかりで友達か……。まったく、本当にフレンドリーな奴だな。

「がんばれよ、獅音！」という十代の激励を背に受けて、俺は苦笑しながらデュエル場へと歩を進めた。

「やっと来たノ〜ネ！　あまり人を待たせるものではありません〜ノ！」

「スンマセンね」

デュエル場に着いた途端、クロノスの野郎に怒られた。ま、多少遅れたから仕方がないか。

「で、試験の相手は誰ですかね？」

見たところ、ここにはクロノスしかいないようだが……。グラサンの試験官はいないのか？

「フッフーン、アナタの相手はこのワタシがします〜ノ！　光栄に思いなさい！」

「はあ!？」

イヤイヤイヤ、なんでだよ!?　なんで実技指導最高責任者のア  
ンタが出てくるんだよ!　俺のこと落とす気満々じゃねえか!?

俺がなにかしたのかよ!!　……うん、まあ、心当たりメツチ  
ヤあつたわ。

「俺に勝つても、十代に負けた事実は変わらないっすよ……」

だからといってこのまま従うのも癪なので、若干の嫌味を込めて  
ぼやいてやる。試験の難易度が跳ね上がったんだ、これくらいの嫌  
味は構わんだろ。

「ギクリンチヨ!?　な、なにを言ってるノ〜ネ!?　ワタシは  
ただ、試験に遅刻するようなドロップアウトは、これ以上アカデミ  
アにいらなと思ったただけでス〜ノ!　アナタを倒して、汚名挽回  
を図ろうなんて、これっぽっちも思っていないノ〜ネ!」

そう言つて、エレキギターみたいなデュエルディスクを構えるク  
ロノス。肩こりそうだな、アレ。

……つて、ちよつと待て。オイコラ、後半の本音は完全に私怨じ  
ゃねえかデメエ!?

改心するまでは本当に曲がったエリート主義者だなコノヤロウ!!

「建前の方も教育者としてはどうかと思うが……あと、正しくは  
汚名返上だ馬鹿」

今のコイツに敬語を使うのも面倒なので、普段の口調で純度12  
0%の嫌味を言つてやる。

日本語もちゃんと勉強しろよ、と思いつながら俺もデュエルディス  
クを構え……おお、スゲエ!　変形した!　間近で見るとカッケエ

なコレ！

「グギギ……！　そ、そんなこと知っているノ〜ネ！　さっきのは、ほんの冗談です〜ノ！」

そんなことより、早く試験を始めるノ〜ネ！」

ありや、怒らせちゃったかな？　まあ、反省はしないが。

「イヤ、絶対間違えたただけだろうが……まあいい、いくぞ！」

「デュエル……！」

あ、そついや気になっていたが……

「なあ、先攻後攻はどうやって「ワタシのターン、ドローニョ！」

……」

オオオオイ！？　マジで言ったもん勝ちなのかよ！　ジャンケンくらいしろよ！？

とはいえ、まだ先攻を取られたただけだ。まあ、最初のターンは様子見だろ。



……そんなことを思っていた時期が、俺にもありました。

「ワタシは、カードを二枚セット！ さらに魔法カード、『大嵐』を発動するノ〜ネ！」

効果によって、フィールド上の魔法・罠カードをすべて破壊デス〜ノ〜！」

え……？ この展開はまさか……！！？

「ワタシのセットしたカードは、二枚とも『黄金の邪神像』！

このカードが破壊されたとき、ワタシのフィールドに、邪神トークンを特殊召喚するノ〜ネ！」

邪神トークン

レベル4 闇属性 悪魔族 ATK/DEF 1000

「さらに、ワタシは邪神トークン二体を生贄にして、手札より

『古代の機械巨人』を攻撃表示で召喚するノ〜ネ！」

『古代の機械巨人』

レベル8 地属性 機械族 ATK/DEF 3000

「ワタシはこれで、ターンエンドナノ〜ネ！」

クロノス LP 4000

手札 2枚

モンスター 『古代の機械巨人』

魔法・罠 0枚

ちよおおおおおおおおい！？

なにしてんの、コイツ!? 先攻1ターン目から張り切りすぎだ  
バカヤロウ!

「……随分と大盤振る舞いだな」

「フッフーン! サレンダーするなら今のうちデス〜ノ、ドロップアウトボーイ!」

観客席からは「終わったな、アイツ」「かわいそうに……」「なんて声が聞こえてくる。

ついでに「ザマーミロ!」「しよせんドロップアウトだぜ!」という声も聞こえてきた。

うつせー馬鹿、余計な御世話だ!

ドヤ顔で喋っているクロノスの顔面に、デュエルディスクを投げつけたい衝動に駆られながらも俺はデュエルを進めることにした。

「その台詞は負けフラグだぞ、先生……俺のターン、ドロ〜!」

アレ、そういやこのデッキって誰のデッキだ?

最初からディスクにセットされてたけど、もしかして俺のデッキじゃない可能性もあるんじゃないかね?

内心でヤバイと思いつつも、とりあえず引いたカードと手札を手エックして 確信した。

これは俺のデッキだ、間違いない。

しかし、よりによってこのデッキか……。ちょっとした不安はあ

るが、まあ、この世界には一番向いているか？

それにこの手札なら……吠え面かかせるくらいは出来そうだ。

「俺は『ジャイアントウィルス』を召喚」

『ジャイアントウィルス』

レベル2 闇属性 悪魔族 ATK/DEF 1000/100

「バトルだ、『ジャイアントウィルス』で『古代の機械巨人』に攻撃」

「ブホホホ！ そんなモンスターでワタシの『古代の機械巨人』に攻撃なんて、さすがはドロップアウトボーイでス〜ノ！ 迎え撃ちなさ〜イ、アルティメットパウンド！！」

「ぐっ……！！」

獅音 LP4000 2000

さすがに痛いな……ま、ただ自爆させたわけじゃないんだが。

「俺は、『ジャイアントウィルス』の効果を発動する。このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られたとき、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える。さらに俺は、デッキから『ジャイアントウィルス』二体を攻撃表示で特殊召喚する」

そして現れる、巨大なウィルス達。やっぱりコイツ便利だよなあ……バーン、戦線維持、墓地肥しを一匹でこなすんだぜ？

クロノス LP 4000 3500

「フンッ！ この程度のダメージ、痛くもかゆくもないノ〜ネ！」  
「塵も積もれば山となるってな……俺は、カードを二枚セットしてターンエンド」

獅音 LP 2000

手札 3枚

モンスター 『ジャイアントウィルス』 × 2

魔法・罠 2伏せ

え？ 「ほえ面かかせるって、ワンキルじゃねーのかよ!？」  
「つて？」

いいんだよ！ 高速展開するデッキじゃねーんだから！

「ブホホホ！ 偉そうなことを言ったわりには、大したことないノ〜ネ！」

ワタシのターン、ドロ〜！ ワタシは手札より、『古代の機械騎士』を攻撃表示で召喚するノ〜ネ！」

『古代の機械騎士』

レベル 4 地属性 機械族 ATK/DEF 1800/500

「バトル！ ワタシは、『古代の機』おっと、バトルフェイズに入る前にリバースカードオープン！ 罠カード『和睦の使者』を發動。これでこのターン、俺と俺のモンスターが受ける戦闘ダメージはゼロだ」グヌヌ……ワタシはカードを一枚セット！ これでターンを終了デ、アンタのエンドフェイズに俺は速攻魔法『終焉の焰』を發動。俺の場に、『黒焰トークン』二体を特殊召喚する」人のセ

リフを遮るのはやめてほしいノ〜ネ!!」

『黒焰トークン』

レベル1 闇属性 悪魔族 ATK/DEF 0

そんなこと言われても、発動タイミングの関係上な……。まあ、半分以上わざとだが。

「フンツ、そんなザコばかり並べても、ワタシの『古代の機械巨人』は倒せないノ〜ネ!

改めて、ターンエンドです〜ノ!」

クロノス LP 3500

手札 1枚

モンスター 『古代の機械巨人』 『古代の機械騎士』

魔法・罫 1伏せ

「別にコイツラで殴り倒そうとは思ってない……俺のターン、ドロ〜!」

引いたカードは よし、上々!

「このターンで終わらせるぞ、クロノス!」

「な、なんです〜と!?!」

再び観客席から「不可能だ……」「無理に決まっている!」なんて声が聞こえてくる……が、関係ない。テメエらまとめて吠え面かかせてやるよ!

「Let's Party!! 俺は、『黒焰トークン』一体を生贄にして、『邪帝ガイウス』を召喚!」

ディスクにカードをセットしたのと同様

俺の前に現れたのは、重厚な鎧を身に纏いし闇の帝王。

大きさでいえば『古代の機械巨人』に、遠く及ばない。

だが、その姿から放たれる威厳とプレッシャーは、まさに帝王の名にふさわしく。

目の前に存在する機械仕掛けの巨人に、一步も引かぬ存在感を放っていた。

『邪帝ガイウス』

レベル 6 闇属性 悪魔族 ATK/DEF 2400/1000

ヒヤッホウ! ソリッドヴィジョンのガイウス、マジかっけえ! もう立体映像とは思えねえよ、この存在感……アレ、今一瞬こっち見なかったか? まあ、気のせいかな……?

そんなことを考えていると、また観客席がざわめいている。さっきまでとは違う感じのざわめきだが、今度は何が「スツゲエ!!!」あのモンスターメチャクチャかっこいいぜ!!!「あ、十代だわこれ。」

てか、なんかクロノスまで慌てた様子なんだけど。

「み、帝モンスターデスクト!? なぜアナタのようなドロップアウトボーイが、そんなレアカードを持っているノ〜ネ!?!」

え、もしかして帝ってこっちだと、すごいカードなの？  
なるほど、どうりで客がざわめくわけだ。

やだなあ……あんまり目立ちたくなかったのに（あんなことやらかしといて、今更だが）。

「アンタに教えてやる義理はない！ 俺はガイウスの効果を発動！ このカードが生贄召喚に成功したとき、フィールド上のカード一枚を除外する。俺が選択するのは、アンタの伏せカード！」

あれ、そういやこの世界だと効果名とか技名とか叫んだ方がいいのか？

「やれ、ガイウス！ イヴィル・コア！」

こんな名前でもいいのか！？ と思いつつ、効果名を叫ぶ。

さて、除外されたカードは……ミラフォ！？ あぶねえ、なに伏せてんだコイツ！

「マンマミ〜ア！？ ワタシのミラーフォースがあ〜！？

で、でもそんな攻撃力じゃ、ワタシの『古代の機械巨人』にはかないません〜ノ！」

んなこたあ、わかってんだよ！

「まだ、俺のメインフェイズは終わっていない……！ 俺は手札より、魔法カード『二重召喚』を発動！ このターン、俺はもう一度だけ通常召喚を行える。俺は、チューナーモンスター『ダークリゾネーター』を召喚！」

「……」 チュ、チューナーモンスター!? 「……」

おおぅ!? すげえ反応!

そっぴゃ、この時代ってシンクロ召喚ないのか。え、もしかして使うとマズイ?

歴史改変とかになる?

(未来に影響与えるのはマズイよなあ……でも、こいつ出さないと厳しいし……いやでも………だぁー知るか!? どうにかなるだろ!?)

っーか、もしヤバかったらこの世界に来たときに、チューナーもシンクロもデッキから抜かれてんだろ! だから大丈夫! May be!

「俺は、『ジャイアントウィルス』二体と『黒焰トークン』一体に、チューナーモンスター『ダークリゾネーター』をチューニング?」

もう、なるよつになりやがれ!!

「彼はいつたい、何をしようとしているの……?」

「フッ……さっきの110番といい、今年は面白い奴が多いな」



「馬鹿な！？ あんなドロップアウトが！？」

「な、何が起きるんすかつ！？」

「俺のデータにも、こんなモノは……いや、まさか！？」

「へへッ、やっぱりお前は面白いぜ！！ 何を見せてくれるんだ、獅音！！」

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の龍は放たれる！」

シンクロ召喚！

いでよ、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！！」

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』

レベル 8 闇属性 ドラゴン族 ATK/DEF 3000/2400

『グルアアアアアアアアアア！！』

雄たけびを上げて俺の前に現れる、漆黒の魔龍。

その姿に俺が魅入っていると、観客席からまたも声が聞こえてくる。

「「「「うおおおおお!!」「」「」」」

ただし、今までのモノとはまったく性質の異なる、歓声が。

「シ、シンクロモンスター!? そ、そんな、超レアカード、なぜアナタが……!?!」

え? シンクロモンスターのこと知ってるの? 超レアってことは、少なくともこの世界にも存在はしてるのか? ってことは、俺の知ってるGXの世界とは違う?

まあ、いい。まずはこのデュエルにケリを着けよう! 考えるのはそれからだ。つかアンタ、ガイウスの時にも同じような反応してたな。

「もう一度言うが、アンタに教える義理はない! 俺はさらに、墓地に存在する『ジャイアントウィルス』三体を除外して手札より、『ダークネクロフィア』を特殊召喚?」

『ダークネクロフィア』

レベル8 闇属性 悪魔族 ATK/DEF 2200/2800

奇怪な叫び声を発する人形を抱いて現れる、異形の悪魔。こいつはちよっと、ソリッドヴィジョンだと怖いな……。

「で、ですがこれがこれだけではワタシのライフは……」

「いや、詰みだ！ 『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果発動！ 1ターンに1度、自分の手札が0枚の場合に相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える！ 俺が選択するのは当然 『古代の機械巨人』！ いけ、インフェルニティ・デス・プレス！」

クロノス LP 3500 2000

「まあ、この効果を発動したターンコイツは攻撃に参加出来ないが……No Problemだ！」

「そ、そんな……このワタシがドロップアウトボーイに二度も……」

「まずは、ネクロフィアで『古代の機械騎士』に攻撃！ 念眼殺……」

ネクロフィアの放った波動のようなものによって、『古代の機械騎士』が……

え、いやこれはちょっと……

「ヒイツ!? ワ、ワタシのモンスターが!?!」

クロノス LP 2000 1600

その、なんていうか……子供には見せられない感じに『古代の機械騎士』は倒されました。

えっと、具体的には×××（自主規制）が×××（自主規制）を×××（自主規制）にして、×××（自主規制）な感じだ。  
ヤベエ、どうしようこの空気……ん、なんだ？ ネクロファイアがこっちを向いて……サムズアップ!? 今の倒し方は確信犯か、コノヤロウ!?

会場内はそのあまりの惨劇に、先ほどまでの興奮はどこへやら。重い沈黙に支配されていた。クロノスにいたっては、自身のモンスターがあんなやられ方をしたせいも、呆然としている。

時折悲鳴やうめき声が聞こえてくる中、それらすべての状況を鑑みて、俺は 決意とともに声を上げた。

「……いくぞ、これでトドメだ!」

「「「この空気を流した!」」」

うっせ! 俺だってどうにかしてーよ! でも無理だもん!

許せ、クロノス!

「ガイウスでプレイヤーにダイレクトアタック! ダークネス・ブロウ!」

俺の指示とともに、ガイウスが右手に闇のオーラを纏い、そのままクロノスを 殴りつけたあ!?

ちよ、もうちょい優しくしてやってええええええ!! そいつの（精神的な）ライフはもうゼロよおおおおお!!?

「ペ〜ペロンチ〜ノオオオオオ!?」

クロノス LP1600 - 800

Win 獅音

勝った……いや、うん、確かに勝ったんだが……

どうしようか、この空気？

なんていうか、歓声もないし、特に罵声を浴びせられたわけでもない。ただ、「えええええ……」という空気だけが感じられる。

なんだろう、勝ったのに死ぬほど居心地が悪い。

イヤ、だって仕方ねえじゃん!? 勝たないとアカデミア入れないし!

まさか念眼殺であんなことになるとは思わないし!

俺が悪いのか。俺が悪いのか!?

「ハア……とりあえず上に行くか」

なんだかいたたまれない気分のまま（いや、俺のせいではあるんだが）、俺はデュエル場を後にした。

「おい、獅音!!」

「ん……?」

重い足取りで観客席まで戻ってきた俺（よほど念眼殺のインパクトが強かったのか、みんな俺を見ると涙目になって後ずさっていた）の背中に、突然声がかけられる。

声のした方へ振り向くと、興奮している十代の姿があった。ん？  
後ろにも誰かいるな。

「さっきのデュエルすごかったぜ!! あのドラゴンなんだっただよ!？」

「いや、落ち着け十代。まずは後ろの二人を紹介してくれないか？」

まあ、紹介されずとも知っているんだが。

「っと、わりいわりい。こいつらは」

「いや、自己紹介くらいは自分でしよう」

そういつて出てきたのは、白い学ランを着た黒髪オールバックの

イケメン君と、気弱そうな水色ヘア！。

「俺の名前は三沢大地だ。よろしく頼む」

「ぼ、僕は丸藤翔ツス。よ、よろしくツス……」

「そうか、俺は如月獅音だ。よろしくな」

とりあえず二人と握手する。

ああ……三沢は大丈夫そうだけど翔の奴、完全に怖がってるな……。

「で、さっきのドラゴンは何だったんだよ獅音！ あんなモンス  
ター見たことないぜ？」

再び十代が俺に問いかけてくる。ん？ 十代はシンクロを知らないのか？ おかしいな、クロノスは知っていたみたいだが……。疑問に思いながらも、とりあえず十代に説明することにした

「ああ、アレは」

「シンクロモンスター、で合っているか？ 獅音」

んだが、意外なことに三沢が話に入ってきた。コイツ、エア  
ーマンじゃなかったのか？

「……ああ、その通りだ。知っているのか？」

「一応知識としてはな。まさか、実物を見られるとは思って  
いなかったが」

「なあ、そのシンクロモンスターってなんだ？」

「僕も知らないツス」

ありや、翔も知らないのか？ ちょうどいい、ここは三沢に丸投げしよう。

「悪いが説明頼んだ、三沢」

「いや、お前のカードだろう！？ ……ハア、まあいい。いいか、二人とも。シンクロモンスターというのは、メインのデッキとは別の「エクストラデッキゾーン」に置かれ、自分フィールド上に表側表示で存在するチューナーと1体以上のモンスターのレベル合計が等しい場合に、そのモンスターたちを墓地に送ることで特殊召喚できるモンスターのことだ。この召喚方法をシンクロ召喚という。」

フィールド上モンスターのレベルの合計で召喚できるため、シンクロ召喚ではいきなり強力なモンスターを召喚することが可能なんだ。わかったか？」

……さすが秀才だな、実に的確な説明だ。今度から三沢のことを「歩く遊戯王Wiki」と呼ぼう。

「へへ、なるほどな〜！！」

「すごいんスね！」

うん、二人とも理解してくれたようだ。よかったよかった。



「しかし、シンクロモンスターはかなりのレアカードのはずなんだが……獅音、さっきの帝モンスターといい、お前はどこであるカード達を手に入れたんだ？」

よくなかったあああああああ！？

クソツ、なんて面倒な質問をするんだコイツ……！

「実は俺、こことは別の世界の人間でさ。コイツラは、その世界にいたときに手に入れたんだ」なんて言えるか！

「まあ、いいじゃねえか三沢！ そんなことより獅音、俺とデュエルしようぜ……！」

どう言いわけたものか悩んでいると、十代がそんなことを言う。ナイスだ十代！ これで話題の転換が出来た！ お前は本当にいい奴だぜ……！

「だが断る」

「どこの漫画家ツスか！？ けど、そこにしびれるあこがれるツス！」

「ええ〜なんでだよ？ いいじゃねえか〜」

「試験やったばっかで疲れてるんだ……悪いが、また今度にしてくれ」

どうせアカデミアで会えるだろうし。そして翔、おまえとは仲良くなれそうだ。

「ちえ〜、仕方ねえな。じゃあ、またな獅音！」

「ふむ、どこで手に入れたのか気にはなるが……まあいいか。俺も、お前とデュエル出来るのを楽しみにしているよ、獅音」

「あ、待つてよ二人とも〜。じゃ、じゃあ僕も失礼するツス、獅音君！」

「ああ、じゃあな三人とも」

それぞれに別れを告げて去っていく。ふい〜、どうにか面倒なことにはならずすんだか。

「あのう、スイマセン」

「ん？」

ひとまず心配ごとがなくなったので三人を見送っていると、後ろから声がかけられる。今度は誰だ？

「えっと、112番の人ですよね？」

「ああ、そうだが……」

振り返ってみるとそこにいたのは、制服姿の少女だった。

一般的な水準で言えば、おそらくかなり可愛い部類に入るだろう。顔は小さな卵型で、大きな瞳には太陽のような光が灯っている。

緑がかった艶のある黒髪を背中まで伸ばしたその姿は、不思議と活発さを感じさせた。おそらく、体つきに無駄がないからだろう。

そのしなやかな体には、本当に無駄がなく　どこが、とは言わ  
ない　見れば見るほど、俺はある思いを強めていった。

え、この娘誰だ？

確実に俺の知り合いではないし、あんなデュエルをした後では逆  
ナンということもないだろう（そもそも俺はモテない）。しかし、  
原作にこんなキャラはいなかったはずだ。俺がこの世界に来たこと  
による、事象の歪みというやつだろうか？

そんなことを考えていると、少女が訝しげな眼で俺を見上げてい  
た。

おっと、尋ねられといてなにも言わないのは失礼か。とりあえず  
俺は考え事をしつつも　迂闊にも彼女に対して抱いた第一印象を  
口にした。

「小さいな……」

直後。

バッキイイイイイイイイイイ！！　という音がその場に響  
いたのと、俺のボディに拳が撃ち込まれたのは同時だった。

ぐおお……！！？　今、人体からしてはいけない感じの音がしたぞ  
……！！？

「ど、どこをみてるのさ！？」

少女が胸をおさえながら、顔を真っ赤にして俺をにらんでくる。  
おまけに若干涙目で上目づかいというその様子は、健全な男子なら

ば身悶えするほどに破壊力抜群の可愛さだった。

ちなみに俺はこのとき、腹を押さえながら（拳を撃ち込まれたため）顔を蒼白にして（あまりの痛みに）完全に涙目（耐えきれぬ痛みじゃなかった）だった。健全な男子ですら、身悶えするほどに（物理的に）破壊力抜群の一撃だった。

違うんだ……誤解なんだ……。

「俺が……言ったのは……し、んちようのこと……だ」

「本当にこれだから男の子は……え、身長？」

「背が、低いな……と、思っで。つい口をついて……でた、んだ」

「え、そ、そうだったの！？ ゴ、ゴメン大丈夫！？」

一転して彼女が本気で心配そうに、俺を見てくる。

うう……全くもって大丈夫ではないが、ここは男として強がってでも大丈夫と言わなければ……。

「いや……大丈夫だ、問題ない」

「そ、そっか……よかった、ホントにゴメン」

「あの川を渡ればいいんだろう……？」

「ンネなんて言ってる場合じゃない！？ ダメだから、多分その川は渡ったら戻ってこれないから……！」

「あ……久しぶりだな、じいちゃん」

「手遅れだった!？」

「え、24股? なんだ、女癖の悪さは死んでも治らなかったのか……?」

「おじいちゃん何者!? 元気すぎるでしょ! いや、そんなことよりお願いだから戻ってきて! 結局ボク、まだキミに何一つ本題を話してないんだよ!？」

「ん、なんだじいちゃん? ……なんだそりゃ、意味がわからないが……わかった、言われた通りにするよ」

「アレ、なにか様子が……そっか! きっとおじいちゃんが「まだ、こつちに来てはいけないよ」みたいなことを言って……」

「次回へ続く」

「……でそのヒキは酷くない!？」

第1話 七難八苦！ 俺と試験と謎の美少女（後書き）

はい、第1話でした！

長い……なぜ、こんなに長くなった？

獅音「ひとえにお前の文才のなさだな……まとめる力がなさすぎる」

???「ボク、ヒロインなのにまだ、名前も出てないんだけど……」

返す言葉もありません。でも、その点で言えば獅音も主人公なのに、前回では名前出なかったから。

獅音「だからどうした」

……うん、言ってみただけ。

???「ボクとしては、この終わり方もどうかと思うんだけど？」  
いや、本当に申し訳ありません。まあ、今後もこんな感じだと思  
うけど……とりあえず、こんなに長い文章になることはそうそう  
ありません。今回は、初めだからといって、詰め込みすぎました。

獅音「あとは更新ペースだな……プロローグと第1話の間がこれ  
だけ開くなんて、普通ないんじゃないか？」

重ねがさね申し訳ない……次回からはもう少し早めに

???「出来ないことは、言わないほうがいいと思うよ？」

出来たらいいなーなんて思ったりしてます。

獅音「ダメ人間が……こんな作者の作品でもいい、という寛大な  
読者の方々には、多大な感謝をさせていただく」

おっしゃる通りです。読んでくれた方々、本当にありがとうございます。  
います。

???「まあ、次回も読んでくれるとは限らないけどね（ボソッ）」

獅音「読者が減る方に1000円だ……」（ボソッ）」

主人公とヒロインが言うことじゃないよね!？」

獅音・??? 「初登場時に俺の名前も出さなかったお前の意見  
なぞ知らん(知らない)」

ハイ…………ごめんなさい…………。

獅音「まあ、こんな作品だが…………」

??? 「次回も、ヨロシクね！」

??? 「ところで、次回はボクの名前出るんだよね？」

…………それでは、また次回！

??? 「濁したっつ！？」

第2話 吃驚仰天!？ まさかの出会いと苦い思い(前書き)

遅くなりました!!　そして長くなりました!!　スイマセンとしか言えません。

獅音「後書きでミツチリしぼってやるよ……」  
それでは、第2話開始です。



## 第2話 吃驚仰天!? まさかの出会いと苦い思い

前回のあらすじ

突如として異世界へと飛ばされた主人公。彼は、襲い来る古代の機械に対抗するために悪魔を従えて戦いへと挑む。苦戦の末、辛くも勝利する主人公。しかし、戦いが終わり安堵したのもつかの間！突然現れた少女によって、彼は瀕死の重傷を負ってしまうのだ。た！

「なんでやねん!？」

「おおう!？ なんだ、突然に……?」

「あ、ゴメン！ なんか、いろいろと突っ込まなきゃいけない気がして……おもに上の方に」

「いや、さっき目が覚めたばかりの俺にそんなことを言われても

な……」

じいちゃんに別れを告げて三途の川から帰って来たら、少女がよくわからないことを叫んでいた。上の方って……別に天井には何も無いけどな？ いや、よく見えないからわからんけど。

「なんか混乱しているようだが、ちょっとは落ち着いたらどうだ……？」

「いや、なんでお前はそんな冷静なんだよ！？」

「貴様、さっきまで死にかけていたのだぞ！？」

「そういわれても……意外と大丈夫なもんだぞ？」

「信じられないわね……」

「大した生命力だな」

「……そんな言葉で片付けんの！？」

なんだ、テンション高えな。

え？ 「コイツラのツッコミは正論だ！」って？ いや、だって異世界に飛ばされた今、三途の川に行ったくらいじゃ驚かないって。

にしても、なんか人数多くね？ 俺とあの娘以外に四人ほどいるっぽいが……。どっかで聞いた声なんだがな。

くそ、殴られたときに眼鏡を落としたせいで顔がよく見えん。

「スマンが、俺の眼鏡そこらへんに落ちてないか？ このままだ

と、アンタらの顔がよく見えん」

「あ、それならボクが拾ったよ」

「なんだ、どうも目つきがワリイと思っただらお前、目が悪かったのか？」

「ああ、眼鏡がないとかなりキツイ」

「フン、さっきから随分と睨んでくると思っていたらそういついとか」

「あら、目つきの悪さでいったらアナタも負けていないんじゃない？」

「なんだと!？」

「フツ……たしかにな」

「ハツ、ちげえねえや」

「貴様らも似たようなものだろうが!！」

ギヤアギヤアと言い争う声がきこえてくる。うーん、やっぱりどこかで聞いたことある声だな。

「賑やかだなあ……あ、ハイこれ」

「ああ、悪いな。ありがとう」

少女が俺の手に眼鏡を渡してくれる。思わずお礼を言ったモノの、よく考えたらこの娘のせいで落したんだよなあ……。まあいいか、これでこいつらの顔が確認できる。

「さて、アンタらはいったいどこの誰だ……？」

そう考えて俺は、眼鏡をかけつつ顔を上げた。

目の前に蟹がいた。

「すまない、自己紹介もまだだったな……俺は不動遊星だ」

これは、想像よりもだいたい面倒な世界に飛ばされたなー、と。

ここ GXの世界にいるはずのない 不動遊星 5D・sの主人公の自己紹介を聞きながら、俺は他人事のようにそう考えることしかできなかった。

「で、いったい何の用があるんだ……？」

とりあえずチーム5D・s（面倒だから、心の中ではこう呼ぶことにした）全員の自己紹介を聞いた後、俺は彼らが何故俺のところまで来たのかを尋ねることにした。

……正直なところ、厄介事に巻き込まれる前にとつと遙か遠くに逃げ出したかったが、どうにもそんな選択肢は許されていなかった。なぜかって？

さっきの娘が隣で目を光らせてるからだよチクシヨウ！ 事情を知らない者からすれば、ニコニコと笑うその顔は非常に可愛らしく映るだろう。しかし、さっきあんな目にあつた俺には判る。その笑顔には「ニゲルナヨ？」と書かれていることが！！

そついや、結局この娘が何者なのかを聞いていない。名前すらまだ知らないし、そもそもなんで俺に話しかけてきたのかもわかっていない。……よく考えたら、そんな会つたばつかで何も知らない女の子に俺は、殺されかけたのか……いや、俺の発言が原因だったけどね？

「実は、お前の持っているシンクロモンスターのことなんだが……」

俺の目を見ながら遊星が話し出す。

いかんいかん、思考の海に溺れるところだった。少女のことは後で考えるところ、今はコイツラの話の話を聞こう。

「ああ、シンクロモンスターがどうした？」

「……あのカードを、どこで手に入れたんだ？」

「うわお、いきなり答え辛い質問をしてくれるな……」。

三沢の時みたいにごまかしたいところだが、どうにかなるか？

「なぜそんなことを訊く……？」

うまい言いわけも浮かばないので、とりあえず訊き返すことにする。質問に質問で返すのはあまりよろしくないが、今回はそうも言っ  
てられないだろう。

「実は、知り合いに同じカードを使う奴がいてな」

「少々気にかかったから、貴様に話を聞きにきたというわけだ！」

「まあ、まさかいきなり死にかけてとは思わなかったけどよ」

「明らかに骨が折れたような音がしていたけれど……今更だけど  
アナタ、本当に大丈夫なの？」

チーム5D'sが全員で状況を説明してくれた。なるほど、そう  
いうわけか……。アキさんの心配が地味にうれしいぜ。

しかし、まいった。

試験では勝利に貢献してくれた満足龍だったが、まさかこんなと  
ころで厄介事を引き寄せてくるとは……。さすがは死神鬼柳さんのカ  
ードってことか。

さて、なんて説明したものかね。

俺が異世界の住人というのは、当然ながら言うわけにはいかない。  
あるいは、GXの世界にいる以上なんらかの事態に巻き込まれたの  
であろうチーム5D'sにならば話してもいいのかもしれないが、  
今話したところで混乱を招くだけだろう。このことに関しては、気  
が向いたときにも話すでしょう。てゆーか、事情を話して面倒事  
に巻き込まれたくない。

となると、ここは誤魔化すしかないな。もし、シンクロのない本来のGXの世界でシンクロ召喚を使ったら、誤魔化すのも骨が折れるところだった。が、幸いこの世界にはシンクロ召喚が存在している。これならどうにか誤魔化せそうだ。

「……アンタ達の知り合いは知らんが、こいつは俺が以前パツクで当てたものだ」

「もうちょっと捻ったいいわけしろよ」とか言つなよ？ 変な嘘つくとボロが出るからこれでいいんだよ。ツマンネエ奴とか言っんじゃねえよ！

「……そうか」

俺の目を数秒見つめてから、遊星がそう呟いた。その眼に、一瞬だけ不思議な光が宿った気がした。

これは、バレたか……？

「すまなかつた、変なことを訊いて」

「いや、気にするな」

気にしなくていいから、厄介事を持ち込む前にどっか行ってくれ。

「こいつの言うことを信じるのか遊星！」

なんてことを思っていたら、横からジャックが話に入ってきた。

「試験前にあんな行動に出た奴だぞ！？ どう考えても怪しいで

はないか！」

うっせーよ元キン！ 余計なこと言うんじゃないよ！

まあ、言ってることは正論だが。俺だってあんな行動に出た奴がいたら、真っ先に怪しむだろうし。

いや、違うんだよ？ あれは追い詰められてハイになった俺がやったことであって、普段の俺なら絶対にあんな無茶な真似はしないんだよ。

「落ち着けジャック」

「だが遊星！！」

「さっきも言ったはずだ。俺には、コイツが悪人には見えない」

いや、庇ってもらって悪いが、自分でもあんま善人ではないと思う。

「ま、たしかに怪しいけど遊星がこう言ってんだ。信じてみようぜジャック？」

「そうね、たしかになにか隠しているようだけど……誰にだって人に言えない事情くらいあるだろうし。ましてや、私たちはさっき知り合ったばかりなのよ？ すべて話せって言うのは無茶だわ」

遊星の言葉に続くように、クロウやアキさんも俺のことを庇ってくれた。

あー、でも隠し事をしてること自体はバレてんのね。さすが、だてに場数を踏んできたわけじゃないってか。



それでも 隠し事をしてることが分かっていてなお、俺のことを信じてくれるのは、やはり遊星の人柄故なんだろうな。たぶん、遊星が俺を信じてくれるからこそ、この二人も俺を信じてくれるんだ。

だが、そうなると思っただけ気になることがある。

「不動遊星……なぜ、アンタは初めて会った俺のことを、信じられる？」

普通に考えれば、ジャックの反応は正しい。どう考えても、俺が怪しいのはたしかなんだから。

それなのに、なぜこいつは俺を信じようとするんだ？

「そうだな……最初はなんとなく悪人には見えない程度の理由だったが、さっきの試験デュエルを見て確信した。お前は、悪い奴じゃないとな」

「さっきのデュエルで……？」

はて、俺はなにかしただろうか？

「あのとき、『古代の機械巨人』が召喚された時点で、観客のほとんどはお前の負けを確信していた。だが、お前は全く諦めていなかっただろう」

「そりゃ、まあ……デッキも手札もあったんだ。あのくらいは諦める理由にならんだろ」

あのくらいの布陣は、元の世界ではよくあることだったし。先攻1ターン目でクエーサーを出された時の絶望感に比べれば、あの程度の状況どうにでもなる。

「なにより自分で作ったデッキなんだ……追い詰められたときに信じてやらないでどうする?」

信じればデッキは応えてくれる。俺は、こつこつ精神論が嫌いじゃない。まあ、信じた結果が手札に上級モンスターだらけという結果も多々あるが。

「ああ、その通りだ。そして、それがお前のことを信じられる理由だ」

「ん?」

「カードを信じる奴に、悪いやつなんていない。少なくとも、俺はそう信じている」

「……なるほど」

実に遊星らしいといえば、らしい理由だ。

「フツ……少し話しすぎたな。俺達はそろそろ行くとしよう」

「そうか……」

まったく遊星といい十代といい……主人公っていうのは、みんなこうなのか？　すぐに人を信じやがって……おかげで、隠し事をするのが辛くなる。

「そういえば……お前の名前をまだ聞いていなかったな」

「ああ、言っただけだったか？」

いかな、こいつ等の自己紹介を聞いたときに、俺も言ったもんだと思っただ。

「如月獅音だ。忘れるなよ？」

「フツ……お前のような奴の名前、そうそう忘れないさ」

そう言っただけでクールに笑う遊星。俺はそんなに印象に残ったか？

「言ってくれるな、まったく……まあ、お互い合格していたらアカデミアで会おう」

「ああ、また会おう獅音」

「アカデミアで会うのを楽しみにしているわ」

「そんじゃまたな、獅音！」

遊星、アキさん、クロウが俺に別れを告げて去っていく。

ただ一人を残して、だが。

「フン……おい、貴様」

「……俺の名前は貴様じゃないが？」

「今日のところは遊星に免じて見逃してやる」

イヤ、人の話を聞けよ。

「だが、次に会った時はこうはいかんぞ」

「……どうする気だ？」

「決まっている、デュエルだ！」

けっきょくそうなるのか……まあ、わかりやすくいいんだけどな。

「……いいだろう、気が向いたら相手になってやる」

「フン！ 貴様に拒否権などないわ。せいぜい首を洗って待っている！」

言葉を交わして数秒、俺とジャックは睨みあった。その視線から感じられるのは、明確な敵意と疑念。どうやらコイツ、本気で俺とやるつもりらしいな。

「イヤ、なんでお前はそんなに偉そうなんだよジャック!? ほら、早く行くぞ！」

そんなシリアスな空気は、横から飛んできた大声に吹っ飛ばされた。

「な、クロウ!? 待て、というか貴様どこから出てきた!? 先に行ったのではなかったのか!？」

「お前が来ないから見に来たんだろうが!! ったく、喧嘩なんか売りやがって……わりいな獅音、今度こそまたな!」

「待て、この……放せクロウー!!」

……なんか、シリアスな感じで締めようと思ったたらいきなりギャグになっちまったな。

「俺も帰るか……」

よく見れば、もう試験会場にはほとんど人が残っていなかった。話してる間にけっこうな時間が経っていたらしい。俺もとっとと荷物をまとめて、ここを出るとしよう。

「デッキも持った、デュエルディスクも持ったし……こんなものか」

てか、ここを出た後アカデミアに行くまで俺はどこに住めばいいんだ? 一応金は持っているみたいだが、ホテルに泊まれるほど中身あるかな? いざとなったら野宿しかないか?

「……まったく、不安が山積みだな」

俺の知っている世界とはいくつもの相違点がある、この世界。正直、来た当初はテンションが上がっていたから気にならなかった。だが、いくつかの情報が手に入り普段道理のテンションに戻った今は、不安で仕方がない。面倒事も大量にありそうだし、十中八九赤き竜に関するトラブルも起こりそうだ。

でもまあどうにかなるだろ。なんせ

「とりあえず、楽しんでみるか……」

俺はこんな性格だからな。

自分の中で、ひとまず結論を出した俺は、試験会場を出るために  
一歩を踏み出した

「ちょっと待った

!!」

まあ、一歩目から躓く羽目になったわけだが。

後ろで叫んだ少女に対し俺は、死ぬほど面倒くさそうな顔で振り返った。

おお……眼が怖いぜ、お嬢さん。視線で人が殺せそうだ。その場合、間違いないで殺されるのは俺だが。

「なんだ、人が綺麗に締めようとしたのに……」

「ボクはキミの首を絞めたくなくなったよ……。まだボクとの話が済んでない、っていうか始まってもないのに帰らないでよ!？」

「いや、さっきからセリフがないから、もういなくなったのかと……」

「ずっとキミのとなりにいたでしょ!？」

「甘いな、文章媒体でセリフがなかったら誰も存在に気づかんぞ」

「文章媒体!？ え、何の話!？」

いや、一般論だが。気にするな、なぜか言わなきゃいけない気がしただけだ。

「チツ……あのままうまく、気付かないふりしてフェードアウトしようと思っていたのに……」

「確信犯だったの!？ 人の名前も聞かない内からどこかへ行こうとするのは止めてくれないかな!？」

「そう言われてもなあ……アンタからは厄介事の匂いがするからな。事情を聞かされる前に、ずらかろうかと」

「そんな曖昧な理由で!？ ……まあ、あながち否定できないけ

ど(ボソッ)「

「おい、今聞き捨てならないことを言わなかったか？」

言っておくが俺の耳は超地獄耳だぞ。自身にとって必要なことなら、どんなに離れていようと聞き逃さないからな？」

「き、気のせいだよ！ それよりも、厄介事の匂いってなにさ？  
ボク、そんな弾薬とか硝煙の匂いはさせてないと思うけど」

誤魔化すの下手だな、この娘。まあ、嘘が上手すぎるよりはいい  
と思うけどな。しかし、まあ……。

「お前にとつての厄介事は、えらくハードボイルドだな……。匂  
いっていうのは、そういうことじゃない。もっと簡単な理由だ」

「え、なに？」

「お前みたいなお可愛い女の子が、面倒事もないのに俺みたいな奴  
に話しかけてくるわけないだろうが」

「なっ……!？」

あ、ダメだ。自分で言ってるてなんか悲しくなってきた。でもまあ、  
事実だし。

元の世界でも、女子が俺に話しかけてくる理由の八割方が「宿題



教えて?」とかだったからなあ……ヤバイ、思い出したらちよつと泣けてきた。

「か、可愛いつてそんな……。うううう、不意打ちすぎるよう……!」

「ん? どうした、顔が赤いぞ?」

熱でもだしたのか? そんな素振りはなかったが……。

「な、なんでもないっ! (バキツ!)」

「グフオアツ!」

いてえ!? 心配しただけなのに殴られた! しかも裏拳で! なんて!?

「お、俺がなにをしたんだ……!」

「ゴ、ゴメン! で、でも、キミも悪いんだからね!」

俺も悪いの!? ダメだ、女子の考えることマジわからねえ!

「そんなことよりも!」

「いや、俺の被害はそんなことじいいかげんに、本題に入らせてもらってもいいかな!」力技で話を進めるのはやめてくれないか!」

この状況で強引に話を持ち出してきやがった。人の話を遮るなん

て、なんて奴だ！

「とりあえず自己紹介から。キミは如月獅音君でいいんだよね？」

「なんか、色々釈然としないんだが……まあ、それで合っている。忘れるなよ？」

「いや、これだけ色々言ってきた相手を忘れられたら、それはもう誰かに記憶を操作されたとは思えないよ……」

「食蜂操祈さんとか？」

「そんなメンタルがアウトな感じの人に襲われる覚えはないよ！？」  
「というか、この会話大丈夫！？ おいてけぼりにしてない！？」

「いや、誰を？」

「なんか、こう……ある意味神様みたいな人たちを」

「そうか……ちょっと待ってる、良い病院探してやるから」

「頭がおかしくなったわけじゃないからね！？ そして気付けばまた話が脱線している！？」

「チツ……気付かなきゃよかったものを……」

「また確信犯！？」

当たり前だ。本題を話されたら否応なく巻き込まれそうだからな。俺は、面倒事からは全力で逃げる主義だぜ！

「うっ……話す相手を間違えたかなあ」

「あ、じゃあ帰っていいか？」

「自分の気持ちに正直すぎる！ この状況でそんなこと言っかな普通！？ こうなったら意地でも返さないよ！！」

「ええー……」

「ええーじゃないよ！ むしろこっちのセリフだよ！ キミ、ボクに対して自由すぎじゃない！？」

「いや、こんなに長い話に付き合っただけで、かなり優しいと思うが」

「話が長いのはキミが素直に聞いてくれないからだよ！？」

ゼエゼエと息を切らしながら、彼女がこちらを睨みつける。叫びまくってヒートアップしたせい、顔は少し赤みを帯びていた。

むっ……個人的に、彼女のこの姿はかなりツボなのだが、これ以上怒らせるとさっきのように必殺の一撃が放たれる可能性もある。そろそろ話しくらいは聞いてやるか。

「スマン。アンタの反応が一々可愛いからつい、余計な話をしちまった」

とりあえず今までのことを謝しておく。言うておくがこれは嘘じゃないぞ？ これだけふざけても、良いツッコミを返してくれる相手と話すのは、楽しいものだ。相手が可愛いのなら、なおさらだ

っ！！

「あうう……！？ ま、まあいいよ！ ちゃんと話を聞いてくれるんだったら」

おお！ どうやら怒りは収まったらしい。やっぱり謝るのは大事だな。

「……まったく、そんな風に言われたら怒るに怒れないじゃん  
ボソツ」

「ん？ なんか言ったか？」

「なんでもないっ！」

うーん、なんか聞こえた気がしたんだが。ちなみに俺の地獄耳は、自分に必要なこと以外は特に聞きとらない。まあ、聞き取れなかつたってことは、大したことじゃなかったんだな！

「それじゃあ、改めて。ボクの名前は水無月みなつき 葵あおい。よろしくね？」

「ああ、まあよろしく水無月」

「あ、ボクのごとは葵でいいよ」

「そうか、なら俺のごとも獅音でいい」

「うん、よろしく獅音君！」

なにが嬉しいのか、さっきまで怒っていたとは思えないような満

面の笑みで俺の名前を呼ぶ葵。表情がコロコロ変わるなあ、この娘。見てて飽きないからいいけど。

「じゃあ、さっそく本題なんだけど……」

「ああ、なんだ？」

本題ねえ……。まあ、さっきはああいったけど、話を聞いたくらいで巻き込まれるようなことはないだろ。そもそも、厄介事だと決まったわけでもないしな。

「この世界をいっしょに救ってもらえないかな？」

「……………は？」

え？ 今なんつったこの娘？

「いや、だからこの世界をいっしょに救ってもらえないかな？」

あ、聞き間違いじゃなかったんだ。

そっかー、世界を救ってほしいのかー。なるほどなー。

「……………ハアアアアアアアアツツ!？」

「うわっ！？ ど、どうしたの、突然叫びだして？」

不思議そうな顔で俺を見上げる葵。イヤイヤイヤ、そりゃ叫ぶわ！？

「よりもよって、世界を救えだど……！？」

超ド級の厄介事じゃねえか！ 想像の遙か斜め上だったよ！

「そういう重要なことは、行間を空けてから言えよ！ 何気なく言うからビックリしたわ！？」

「行間？ えっと、何の事を言ってるかわからないけど……ダメかな？」

頬をうつすら朱に染めながら、手を前の方でモジモジと組みながら上目づかいでこちらを見てくる葵。

カワイイじゃねえか、チクシヨウ！！ 話しの内容がこんなんじゃないければ、絶対引き受けてたわ！！

「とりあえず事情を話してくれ。ハナシはそれからだ」

「あ、うん。その前に確認するの忘れてたんだけど……」

「は？ 今度はなんだ？」

これ以上なにを言う気だ、この娘。

「キミって、異世界の人？」

「ええええええええええええツツ!? だから、爆弾発言を何気なく言うのはやめてくれる!? サラツと何言ってくれてんのこの娘!?!」  
「いまだかつて、ここまで何気なく異世界の人間であることを指摘された人間がいただろうか？」

「あ、その反応をみると、当たってるんだね？」

「いや、もう……いいや、誤魔化すのめんどくせえ。そうだよ、異世界から来たよ。なんか文句あんのかよチクショウ！」

「ええ!?!? なんでキレられてるのボク!?!」

人の秘密をサラツと言うからだよ!

「お前は今、どこぞの親善大使殿に「貴様はレプリカだ」と告げるのをゲーム開始直後に言ってしまうくらいの罪を犯した……」

「えっと、なんかゴメン……」

「まあいい。いや、良くはないがとりあえずこの話は後で小一時間ほど話すとしてだ」

「けっここう根に持ってる!?!」

晴らすまでは、どんな些細な恨みだろうと忘れない。それが俺。

「なんで俺が異世界から来たとわかった？」

そんな素振りは見せなかつたと思うが？

「いや、だって……キミ、原作で見たことのない人だったし。おまけにあんな派手な真似までして、そのうえこの世界ではかなりのレアカードである帝にシンクロまで使うんだもん。そりゃ、わかるよ」

「ああ、うん……そう言われたら何も言い返せないわ」

予想以上に正論だった。こうして考えると俺、ホントにメチャクチャやったんだな……。 「正体隠す気ゼロじゃん!!」と言われても仕方がない。

「で？ 俺が異世界の人間であることと、さっきの発言がどう関係あるんだ？ 別に俺は、神様に選ばれた勇者とか、そんなんじゃないぞ」

まあ、勇者うんぬんはさすがに冗談だが。なんでここにいるのか、こっちが聞きたいくらいだ。

だというのに、俺のセリフを聞いた葵は、なぜかものすごく驚いた顔をしていた。

「え！？ 選ばれたわけじゃないの！？」

「なにその反応！？ え、もしかしてマジでそういう展開なの！？」

俺は勇者だったの！？ 竜王討伐にでも行くの！？

「くそ、ひのきのぼうすら装備してないっていつの間に……」



「どこの世界を救う気なの!? 落ち着いて、まずは復活の呪文を……」

「お前が落ち着けえええっ!!」

ダメだ、俺のポケにツツコミを入れずにポケをかぶせてきやがった! かなり混乱してやがる!

「ちょっと待て、お互いかなり混乱している。ここは、状況を整理するためにも落ち着こう。とりあえずお前の話を聞かせてくれ」

「う、うん。最初に言っておくと、ボクも異世界から来たんだよ」

「ホント、サラッと重大なことを言うな……」

「今更隠しても仕方がないし、キミだって薄々気づいてたでしょ?」

「まあ……ねえ」

原作とか言ってたし。

「えっと、ボクはわけあって元の世界で死んじゃったんだけど……」

「重い!? もっと軽い話かと思ってたのに!? どんなわけがあっただよよ!」

「ん……それはまた、そのうちにね?」

「そこ隠すのかよ……」

「一番重要じゃないか、それ？ まあ、死んだ理由を話せとも言いづらいし、ここは流しておくか。」

「それで、この世界に転生した……というか、させられた理由なだけで」

「ようやく確信に迫ってきたな」

「なんでも、今この世界にはすごい歪みが発生してるらしくてね？ どうもその歪みっていうのが、意図的に引き起こされているとかで。そのせいで本来の世界とは、だいぶ違う世界になっちゃってるらしいの。キミもわかるでしょ？」

「まあ、シンクロが存在してるしな」

「そんな大層な理由があったとは思わなかったが。せいぜいパラレルワールドなんだな、くらいだと思ってたわ。」

「それで、ボクはもう一度新しい人生を与えられた代わりに、この世界の歪みをどうにかしなきゃいけないかって……」

「えらい壮大な話だな……お前にそんなこと頼んだのはどこの誰だよ？」

「うーん、詳しくはボクもわからないんだよね……でも、言うてることは嘘じゃないと思うよ？ 実際ボクは死んじゃったはずなのに、ここに生きてるしね」

「軽いなお前……」

「そうかな？ ……いや、言いたいことはわかるよ？ でも、せっかく二度目の人生をもらったんだから、あんまり暗いこと考えても仕方がないでしょ？」

ヘラツと力なく笑う葵。

口ではこう言っているが、その顔を見るに、やっぱり色々と考えてしまうことはあるようだ。自分が死んだこととか、なにもかも吹っ切れているわけじゃないんだろう。

まあ、かといって俺には何も出来んのだが。する気もないしな。なに？ 「冷たい」って？ 言っただろう、厄介事からは全力で逃げる主義だと。それに、会ったばかりのコイツから、悩みを聞きだしてまでどうこうしてやる義理はない。

ない、はずなんだ。

「まあいい、事情はわかった。だが、その話に俺が関係するとは思えんぞ？ この世界の歪みを直せなんて言われてないし、そもそも何故この世界にいるのかもわからんからな」

生憎と、俺には誰かに連れてこられたという記憶はない。寝て起きたらここにいたのだ。

「それなんだよねえ。キミは転生したわけじゃないの？」

「断言するが、死んでいない」

「ボクはてつきり、キミも同じ理由で来たんだと思ってたからな

あ……まさか、来た理由すら不明とは思わなかったよ」

「ご期待に添えず申し訳ないな」

「いや、ボクも確かめなかったから。こっちこそごめんね？」

そう言っつて、葵が頭を下げる。その顔には、少し困ったような  
あるいは、わずかな落胆だったのかもしれない。笑みが浮かんで  
いた。

チツ……ここでコイツが、無理やり人を巻き込むような女だった  
なら、断るのに躊躇いなんていらなかったんだがな。こんなアツサ  
リ引き下がられたらうえに、そんな顔されたら罪悪感で死にそうに  
なるだろうが。

「気にするな。それと」

それでも、俺は

「悪いが、俺は手伝ってやれそうにない」

葵に、いっしょにやってやるとは言えなかった。

「……そつか。大丈夫だよ、気にしなくても！ 意外と、ボク一  
人でも強いから！」

エッヘン！ と、胸を張りながら気丈に笑う彼女の顔からは、怒

りとか失望とかは感じられない。それが、余計に辛い。

「いや、お前が強いのはよくわかっている。なんせこの身で味わったからな」

「なっ!？　ち、違うよ、デュエルのことだよ!」

「なんだ、そっちか。あまり強そうには見えないが」

「失礼な!　見かけで判断したらダメなんだよ!」

「ハ、そいつは悪かった。アカデミアで会ったら、ぜひ手合わせしてもらいたいな」

「むう、信じてないね。いいよ、絶望を見せてあげるよ!」

「お前それ、完全に悪役のセリフだよ……」

「あはは、ほんとだね」

そんなやり取りを交わした後、二人して笑いだす。笑顔が歪んでないか、少し不安だった。

「そうだ!　せっかくだから、連絡先交換しようよ!　これ、ボクのケータイのアドレスと番号。PDAが支給されたら、そっちのも教えるね」

「ん、じゃあこれは俺の連絡先だ」

「うん、ありがとう!」

俺の連絡先を受け取り、嬉しそうな顔をする葵。いや、単純に嬉しそうな顔とは違う。もっと、なにか……いろんな感情が込められたような笑みだった。

けれどこのときの俺には、その笑みに込められていた想いを読み取っているような余裕はなかった。

「じゃあ、合格してたらアカデミアで会おうね！」

「ああ、まあ大丈夫だろ」

「そっか、クロノス先生に勝ったんだもんねキミ。試験の結果は心配ないか。じゃあ、ひとつだけ……歪みを引き起こした人たちが、どこにいるかわからないから気をつけてね？」

「……人の心配してる場合じゃないだろ？　どんな奴らか知らんが、お前こそ気をつける」

「あはは、ありがとう。それじゃあ、またね！　あ、出来ればメールとか電話してくれると嬉しいな？」

「へいへい………そんなじゃな」

大きく手を振りながら、彼女は悪戯っぽい笑顔で試験会場を出て行った。たぶん、普段だったら間違いないその姿に見とれていただろう。

「さて、今度こそ俺も帰るか」

つつても、どこに行くかな？  
とりあえず、ホテルでも見てみるか。

『本当に、良かったのか？』

でも高えんだろーなあ、ホテル。

手持ちにいくらあるか、確認しとかないとな。

『あの少女に、手を伸ばしてやらなくて』

げ、あんま持ってないな。

やばいな、これは野宿か？

『聞こえているのだろう、我が』

「うるっせえんだよっつ！！」

ガンッ！！と

思いつきり壁を殴りつけたのと、頭に響く謎の音が消えたのは同

時だった。

「わかってんだよ、そんなことは……」

吐き出す言葉に力は無く、口の中には苦い味が広がる。

さっきから聞こえていた声の言うことは、きっと正しい。

だけど

「……俺はもう、厄介事に首を突っ込むのは御免なんだよ……」

血を吐くようなその咳きは、人の耳には届かない。

気付けば壁を殴った右手には、今更のように鈍い痛みが走っていた。



## 第2話 吃驚仰天!? まさかの出会いと苦い思い(後書き)

第2話でした。まずは読んでくださってありがとうございます。そして、ここからは懺悔の時間です

獅音「なにか遺言いいわけはあるか、駄作者」

グハアッ!?

葵「あれば聞き流してあげるよ?」

うつうつ……ごめん。でも、学校の課題と重なったりしたからさあ……。

獅音「読者のみなさんには、そんな事情は関係ないだろうが」

仰る通りです……。

葵「これからは、もっと精進しようか」

ハイ……スイマセン。

獅音「じゃあ、内容の方だが……なんでこんな長くなった?」

色々と詰め込んでいたらこんなことに……いや、面倒な事情はある程度最初の方で消化した方がいいかと思って。

葵「まあ、アリだとは思うけど……もう少し綺麗にまとめようよ」

グフッ!?

獅音「おまけに、俺と遊星の喋り方が若干かぶるぞ。どうするんだ?」

ああ、そつちはちゃんと考えてあるから大丈夫。

獅音「あと、俺のキャラ。どうにも主人公らしくないが」

それも大丈夫だよ。

葵「ボクも、ところどころ思わせぶりな描写があっただけど?」

全部まとめて無問題!<sup>モクマンタイ</sup>! そういう意味では、今回伏線をバラまきまくった回だからね。だから長くなっちゃったんだよ。

獅音「そういうことか……まあ、いいんじゃないか? 回収さえちゃんとすれば」

もちろん回収するよ! まあ、ちょっと先の話になりそうだけだね。

葵「まあ、そういうことならいいかな? 後は……」

後は?

獅音「長く間が空いたために、読者さんが離れていないかだな」

イヤアアアアッ!? 怖かったから触れなかったのに!?

獅音「まあ、仕方がないだろう」

葵「完全に自業自得だからね」

うつ、冷たいよ二人とも……

獅音「さて、馬鹿が良い感じに凹んだところで、そろそろお開きにするでしょう」

葵「前回感想をくれたみなさん、本当にありがとございました！  
！この場を借りて、お礼を申し上げます」

獅音「それじゃあ。こんなキャラだが、嫌わないでほしいと切に願う獅音と」

葵「ボクのデュエルはいつになるのかな？ 気になって仕方がない葵でした！」

獅音・葵「じゃあね〜！」

獅音「……俺が、「じゃあね〜!」なんて言うキャラか……?」

葵「ここだけだから、我慢してね?」

ハッ!? 凹んでる間に、俺の仕事が終わってる!?

**第3話 体調最悪！！ 悲惨な一日、深夜の遭遇！（前書き）**

やっと書けた……！ 恒例になりつつある懺悔は後書きにて。  
それでは、第3話スタートです。

獅音「おい、デュエルしろよ」

**第3話 体調最悪！！ 悲惨な一日、深夜の遭遇！**

前回のあらすじ

主人公はヘタレだった。

「はい、これ。少しずつ飲んでね？」

両手にジュースの缶を持った少女が、そう言って俺に片方の缶を差し出してくる。色々と思うところはあったが、俺はとりあえずそれを受け取ることにした。

普段なら冷たすぎるそれが、今の俺には心地いい。ふたを開けて、一口飲む。適度な甘さが体中に染みわたっていくようで、やべえスポーツドリンク超うまいなんて思いながら、俺は彼女に言葉を返した。

「ああ、スマン……。……しかし、覚えてるよクソ作者……。うえっぶ……。」

「いや、作者って誰？ それよりも大丈夫？」

「気にするな……。大丈夫だ……。一周回って」

「それ大丈夫じゃないよね!？」

ユラユラ揺れる船の中、その一室。

たいして広くもない部屋の中に、少女の声がよく響く。ついでに、俺の頭にも響く。

「うっ……。グロッキー状態の人間に、その大声はキツイぞ……。」

「ゴ、ゴメン……。でも、キミの場合は自業自得じゃないかな？」

心配そうにしながらも、少しあきれた様子を滲ませて少女が話しかけてくる。

まっすぐこちらを見つめる瞳は、深く澄んだ夜を連想させる色で、見る者を吸い寄せた。けれど、その中に少しだけ不安そうに揺らぐ光が見て取れた。口では呆れたように言っているけど、その眼を見る限り俺のことを純粹に心配してくれているのだろう。

そんな彼女の様子を見て、俺は若干の気恥かしさ　それと多分に含まれる罪悪感　から、彼女に背を向けつつ言葉を返した。

「言うなよ……わかっとるわ……」

いや、まったく。

これは彼女の言うとおり自業自得だ。弁解のしようもない。

おかげで、せっかくの機会をベッドの上で過ごすことになってしまった。十代達と会話をしておきたかったんだがなあ……。

まさか、アカデミアに向かう船の上でこんな状態になるとは思ってもみなかった。

そんな訳でこんにちわ、如月獅音です！　船酔いしました！！

……アレだな、語尾にエクスフラメーションマークをつければテンション上がるかと思っただが、そんなことはなかったんだぜ。体調が最悪なため、テンションだけでも上げておこうかと思っただが。

「ハア……マジで気持ち悪い……」

「まったく……寒いのに野宿なんかするから体壊すんだよ？」



全くもってその通り。彼女　水無月葵の言うことは、重ねがさね正論である。

一応俺にも事情はあったのだが、どう言ったところでこの件については葵が正しい。

「仕方ないだろう……金がなかったんだから」

などと頭ではそう思いつつも、つい反論してしまうのは俺の性格ゆえだろう。我ながら面倒な奴だ。

「もう、言ってくれば少しくらい貸したのに」

「俺だって、自分の所持金が判ってたら借りてたわ……」

いや、たぶん判っても借りなかっただろうけど。それにしたって相談くらいしていれば、なにかいい知恵を拝借できた可能性もある。そうすれば、現在こんな体調で苦しむこともなかったかもしれない。

まあ、最早後悔してもどうにもならんがな。

あの日、試験が終わった後

俺は、中々に後味の悪い想いを抱えながら試験会場を出た。

簡単に吹っ切れるようなものではなかったが、無理やりにそれを

頭の片隅に置いやつて、俺は当座の生活について考えることにした。合格発表までの間、泊るところはどうするか、食料はどうするか。

「なにせよ、現在の所持金を確認しないどうにもできんな……」

そう思って、俺は財布の中身を確認することにした。さつき軽く見た感じだと紙幣が五、六枚はありそうだったがどうかかな？

「どれ、まず硬貨が……五円玉……一枚……だと……!?」

うーい棒すら買えないだど!? むしろなんで五円玉が一枚だけ残ってるんだ!? 何を買ったお釣りなんだ!? てか、こんなんで生活できるか馬鹿やろう!

「いや、待て……まだ紙幣が残ってるんだ」

慌てて財布の中を覗き込み、自分に言い聞かせる。そうだ、札があれば五円玉一枚の分を補って有り余る。問題は、何円札が入っているかだ。

「一万円札が入っていれば御の字だが……」

正直、そこまで高望はできないだろう。まあ、千円札でも五、六枚あれば上等だろう。泊る場所がなくても、食料があればどうにかなる。

「さてさて、いくらかな」と……」

残っていた財布の中身をすべて手にとって、見てみる。ふむ、全部で六枚か。なんか、えらく色が白いな。えーっと、何々……ガ

ト、ツタ、ブック、フ、ローン、マクド、ルド、と……。

なるほどなるほど。

「いや、レシートオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!?」

紙幣かと思えばレシートかい! なんだこのトラップ!? てゆうか、財布に入れてないでとつと捨てとけや!!

「クソっ、だがまだだ。まだ一枚残ってるぞ……!」

そうだ、まだ札は一枚残っている! 見たところ、色的にもこれはちゃんとした紙幣だ! 白くないし!

「信じねば、物に出来ないカードがあるっ!! 出てこいや、諭吉イイイイツツ!! デステイニイツ、ドロオオオオオオオオオオオツツ!!」

俺の引いた札は……<sup>カード</sup>……!

大蔵卿50銭札。

「前世紀の遺物ウウウツツッ!？」

スッパアアアン!! と、思いっきり財布を地面に叩きつける。もう、アレだよ。簡単に吹っ切れる筈のない、さっきの後味の悪い葛藤は、このときは完全にどっかにいつてたよ。

ていうか、なんでこんなもん財布にはいつてんだよ!? 予想の遙か斜め上だったよチクショウッ!! 実質一円玉以下じゃねえか!

「ふざけんなよ、クソツタレ……俺をここに飛ばした野郎、不親切過ぎるだろ……!」

試験の時といい、どうにも俺に協力的とは思えないな。どんな奴だか知らんが、見つけたら絶対張り倒す……!

だが、そんな先のことよりもまずは

右手に握られた大蔵卿50銭札と五円玉、そして地面に散らばったレシートを見て深く溜息をつく。

「俺、どうやって生き抜けばいいんだ……?」

う　い棒すら買えないこの状況をどうするかが、目下最大級の試練だった……。

というわけで、野宿をして何も食べなかった結果、こんな体調になりました。

いやね、よりによって俺が野宿を始めた日から、いきなり気温が下がったりしたんだよ。おかげで熱はでるわ空腹で死にそうだわで大変。おまけに、そんな状態で船に乗った挙句このざまだよ。

はっはっは、爆笑だよまったく。あ、今ホントに笑った奴、後で体育館裏に来いよ？

まあ、そんな状態でフラフラしていたところを葵に見つけられて色々あってこの部屋まで連れてこられた訳だ。以下、そのときの詳細。

「あーっ!?! 見つけたよ獅音君! まったくもう、連絡してって言ったのに、キミ一回も連絡くれなかったね! (ボソツ)……ちよつとさみしかつたんだよ……? え? な、なんでもない何も言っていないよ! で、でも、今度からはもうちよつと連絡を……いやホラ、この前話したように、いつ誰に襲われるか分からないから、マメに連絡を取った方がいいんじゃないかと思つて! ほ、本当にそれだけだよ!?! ……つてアレ? 獅音君なんか顔色悪くない? なんか足取りもおぼつかないし……ゴメン、ちよつと屈んでくれる? (ピトツ)熱ツ!? 獅音君、すごい熱だよ!? うわ、顔も真っ赤になつてる! こんなところで話してる場合じゃ……え? 遊城君や三沢君と話しておきたいつて? ダメだよ、そんな場合じゃないでしょ! いいから、どこかの部屋で休ませてもらおうよ。ダルいとか言わないで! (ギュツ!)うわ、また顔が赤くなつてきた! ほら、早く行こうよ!」

……こんな感じにひたすら彼女が喋つた末に、部屋まで連れてこ

られた。まあ、体調悪くてぼーっとしてたから、多少聞き逃したが。ちなみに、途中の（ピトツ）というのは、葵が俺の額に自分の額をくっつけて熱を計ったときの音で、（ギユツ！）というのは、俺の手を握ったときの音だ。俺の顔が真っ赤になった理由、分かってもらえただろうか？

とまあ、これでようやく時間は現在に戻る。

「これに懲りたら次からは、なにかあったら連絡してよ？」

未だに心配そうな顔をした葵が、真面目な様子でそう言ってくる。可愛い女の子にこんな顔で言われてしまえば、「いや、悪いが連絡はしないと思うぞ？」などと言えるわけもなく。

とりあえず誤魔化そうと思い、あれこれ返事を考えた末に

「へいへい……」

と、結果的に適当な返事になってしまったのは、熱で頭の回転が鈍っていることを鑑みればまあ仕方のないことだろう。

……彼女はそう思わなかったようだが。

「ま、じ、め、に！ 言ってるんだけどね？（ミシィッ！）」

「わかった。わかったから、スチール缶を握りつぶすのは止めてくれ」

しかもそれ、まだ中身入ってね？ 先ほど可愛い女の子と言ったがこの娘、本当に女の子だろうか。初対面で殺されかけたし。

「……まったくもう。早く眠ったほうがいいよ？ 体力回復させないといけないんだから」

「ああ、んじゃそろそろ出て行っていいぞ？ ここまで連れてきてもらって悪かったな」

ホントに、とんだ迷惑をかけてしまった。今度どうにかして借りを返さねば、罪悪感で死にそうだ。

「え？ キミが寝るまでここにいるよ？」

「は？」

「ちゃんと眠るところを見ないと心配だしね」

訂正しよう。罪悪感で殺されるかもしれない。

「いやいやいやいやいや……。そこまでしてもらうのは流石に悪い。移ったら大変だしな」

「大丈夫だよ、ボクけっこう丈夫だし。それに、人に移した方が早く治るよ？」

小悪魔のような笑みを浮かべながら、本気が冗談かわからないセリフを葵が言う。こんな体調のときになんだが、その笑顔には、なんとというか、非常にクるものがあった。

なんだ、この美味しいイベント？ 夢か？ 俺の妄想か？  
もしそうだったら……

「楽しかったんだけどなあ……」

「？ どうしたの、突然？」

「こっちの話だ」

本当に、この状況が全部夢ならばどれだけ楽しかったことか。考えるだけ不毛だと知りつつも、そう思ってしまう。もちろん口には出さないが。

「で、マジでここ出ていかないのか？」

「行かないよ？ キミの寝顔を見……キミが眠るまでは」

「おい、今何をいいかけた？」

「な、なんでもないよ？ さあ、早く寝よう！ 眠って、今のことは忘れちゃおう……」

「……まあいい。そんじゃ、とっとと寝るわ」

「ん、おやすみ……」

そう言って、目を閉じた数分後。



「……なんでお前が寝てんだよ」

スウスウと、規則正しい息遣いに眼をあけてみれば、椅子に座った葵が壁にもたれて眠っていた。なんでやねん。

「……つたく、マジで風邪ひくだろうが」

ベッドから立ち上がり、枕元に置いてあった眼鏡を掛け葵のもとに歩み寄る。ここで上着の一つも掛けてやれたらかつこいいのだが、生憎とそんなものはない（金がなかったために、買っていない）。なので、ベッドについていた毛布をかけてやる。多少重そうだが、風邪をひくよりはマシだろう。おかげで俺の毛布がなくなったが。

「この状況で寝たら、俺の体調悪化するんじゃないかね？」

流石に毛布をかぶんなかったら寒いし。かといって……。

「つにゅ〜……」

「こんな幸せそうな顔した奴、起こせないしなあ……」

先ほどの小悪魔のような表情とは一転、天使のような顔で眠っている彼女の寝顔を見てしまえば、無理やり起こすという選択肢は消えてしまう訳で。

「どうしたもんかな」

しばらく起きてるしかないか。いや、でも正直俺の体調もキツイ。頭もガンガンするし、体の節々が痛い。おまけに船酔いで吐き気のオマケつきだ。

「普段なら、多少の絶食と寒さくらいじゃ体壊したりしないんだがな……」

「頑丈だけが自慢だというのに、どうにも今回はマズそうだ。こんな体調は経験したことがない。だれかに、人為的に引き起こされでもしたか？」

「……いや、馬鹿か俺は」

自分で自分の考えにダメ出しをする。どうにも馬鹿なことばかり考えてしまうな。仮に人為的なものだったとしても、俺なんぞ狙う理由がない。

「……あー、やばい。マジで頭痛くなってきた」

イカン、馬鹿なことすら考えられなくなってきた。頭の中でドラム叩かれてるみたいにガンガンする。

こうなってくると、あのととき葵に連絡を取らなかったことを後悔しそつになる。金がなかったんだから、相談くらいしても罰は当たらなかったかもしれない。

そんな思考が、頭をかすめる。

「……ダメだ、体調悪くなると弱気になってしまっな」

何を甘えたことを考えてるんだ、俺は。

「どの面下げて、あいつに相談しろって言うんだ」

彼女を助けることを拒んだ俺に、助けを求める資格などある筈が

ない。いや、それどころか本来なら、彼女と関わることすら許されないかもしれない。

それでも、こうして葵といっしょにいるのは、きつと

「……………つつう!？」

突如、頭に鋭い痛みが走った。その衝撃に、さっきまでの思考が打ち切られる。

どうやら本格的にマズイらしい。

「……………クソッ。とりあえず寝るか……………」

毛布がなくて寒いが仕方がない。このまま起きている方が体に悪そうだ。そう考えた俺は、鉛のように重く感じる体を引きずって、ベッドへと戻った。

「……………おやすみ」

誰にともなく呟いて、俺は再び目を閉じる。気分は最悪だったが、先ほどまでの頭痛が嘘だったかのように、俺の意識はあっさりと沈んでいった。

「んん……………やすみ……………おん君……………」

まどろむ意識の中でふと、誰かの優しい声が聞こえた気がした。

目を開けると、そこには真っ白な天井が広がっていた。

「……知らない天井だ」

こんにちはわ、再び如月獅音です。目が覚めました。  
やっぱ、知らない場所で目覚めたらこのセリフだよな。

「で、リアルにどこだここ?」

眼鏡を掛けてからあたりを見回すと、葵の姿が見当たらない。どうもさっきの部屋とは違うようだ。それに、かすかに消毒薬のような臭いが漂っている。

「揺れが感じられないし、船の上じゃないのか？　なんか異様にのどが乾いてるし、どうなってんだ？」

「あら、目が覚めたのね」

「はい？」

状況を整理しようとしてたら、横から声を掛けられた。突然のことだったので、つい間抜けな反応になったが仕方ない。

声のした方を見ると、そこにいたのは白衣を着たおばさん。「今度は永久に眠らせてあげましようか？」心が読まれた！？　何この人！！

「あの、サイコメトラーの方ですか？」

「いいえ、ただの保健医よ」

クスクスと笑いながら、その人が答える。目が笑っていないが。じゃあ、なんで人の考えがわかったのかという疑問はひとまず置いておく。

保健医ねえ。そういうえば、原作にこんな人がいたような……んー誰だっけか？

「自己紹介がまだだったわね。わたしはオベリスクブルー女子寮寮長の鮎川恵美よ」

ああ、あの原作では珍しいバーン系統のデッキを使っていた鮎川先生か！ アニメを見ていた当時は、子供ながらに上げつないと思っただな。

「あなたは新入生の、獅音君ね？」

「ええ、まあ。新入生の如月獅音です」

とりあえず、こちらでも自己紹介をする。それで、ついでだからさつきから疑問に思っていたことを訊いてみることにした。

「すみません、ここどこですか？」

「あら、覚えてないの……って、意識がなかったから当たり前ね。ここは、デュエルアカデミアの保健室よ」

おおぅ……知らない内に目的地についてたぜ。てか、意識なかったって、かなりやばくね？

「どうやってここに来たんすか、俺？」

「ああ、わたしも詳しくは知らないんだけど……船が港に着いたときに女の子が言っていたらしいのよ。「この人、目を覚まさないんです！」って。それを聞いた新入生の男の子たちが、あなたを抱えてここまで運んでくれたのよ」

「そうなんですか……」

どんだけ人に迷惑かけてんだよ、俺。  
にしても、女の子は十中八九葵だとしても、男子生徒は誰だ？

「俺を運んだ男子って、誰ですか？」

「たしか、遊城君と三沢君、それから丸藤君だったかしら？ ア  
ナタを抱えて、血相を変えて飛び込んできたのよ？ 「先生、獅音  
を助けてくれよ！」 って言いながらね」

じゅ、十代さああああああああん！！

アンタ良い人過ぎるよ！ この前会ったばかりの俺のために、そ  
んながんばるなんて！ そりゃ、明日香やレイにも好かれるよ！  
あと三沢、この前エアーマンとか思ってゴメンね！

「それから、水無月さんって子が何度か様子を見に来たわよ」

マジでか！ 船の中といい、俺はどれだけあいつに迷惑をかけれ  
ば気が済むんだろうか？

「随分心配してたみたいだから、後でお礼を言っておきなさい？」

「はい……」

なんかもう、返しきれないくらい借りを作ってしまったている気が  
するな。十代達にも礼をしなければいけないし、どうしようか？  
カードでもあげるべきか？ いやいや、飯をおごるくらいがいい  
のかな？

どうやって礼をしようか考えて、うんうん唸っていると鮎川先生  
が真面目な顔で話しかけてきた。

「……あなた、体調はもういいの？」

「え？」

「瞬間のことを言われたか判らなかつたが、すぐに思いたす。そつだ、俺死ぬほど体調悪かつたんだ。」

「運ばれてきたときは、意識がないうえに尋常じゃないくらい汗をかいていたのよ？ おまけに、いくら調べても原因が不明だったから困つたわ」

なるほど、どつりで目が覚めたときにのどがカラカラだったはずだ。それに、そんな状態だったなら十代や葵が心配した理由もわかる。

しかしなあ……。

「いや、なんかメチャクチャ身体の調子いいんですけど」

うん、マジで調子がいい。さっきまでのが嘘みたいだ。今ならカード手裏剣とか出来そつだ。

「本当に平気なの？」

「しいて言うなら、のどが乾いてると腹が減ってるくらいです  
ね」

睡眠がとれたおかげで疲れはマシになったが、ここ数日何も食べてなかつたので、そろそろ空腹がやばい。

「うーん、嘘ではなさそつね……でも、残念だけど空腹に関しては、明日の朝まで待ってもらつしかないわね」



「？ そりゃまたどうして？」

「もうこんな時間だからね」

そう言っただけ近くにあってデジタル時計を見せる先生。なにになに、現在の時刻は…… 23時50分!?

「もしかして……俺、ずっと寝てたんですか？」

「ええ。その間に入学式も寮の歓迎会も終わっちゃったわ」

マジかよ……。こんなイベント逃すとか、ついてなすぎだろ。てか、こんな時間に保健室に先生がいるのって俺のせい？

「すみません、こんな時間まで……」

「いいのよ、それが仕事なんだから」

笑いながら答える先生。ああ…… 本当、良い人が多いなこの学校は。嫌な奴もいるが。

「一応校長先生には、アナタのことを伝えておいたから。それと、制服を預かってるわ」

先生から渡された制服の色は赤。オシリスレッドか…… クロノスの野郎、絶対私怨が入ってるな。

「あと、これがアナタの部屋のカギよ」

「どうも、何から何までスンマセン。そんじゃ、これで失礼しま

す

「普通ならまだ安静にしてた方がいいんですけど……この様子だと心配なさそうね。こんな時間に一人で大丈夫？」

「俺みたいなのを襲う奴はいないでしょう」

いたらそれはそれで問題だ。

「それもそうね……それじゃあ、警備員に見つかったらわたしを呼びなさい。事情を説明してあげるから」

「ありがとうございます。失礼しました」

「もう来ないようにな」

先生にお礼を言って保健室を出る。そして、出て一秒で戻る事になった。

再び開いたドアに驚いている先生に、俺は言う。

「すみません、レッド寮ってどこですか？」

「いやー、気まずかった」

お礼まで言って部屋を出たのに、すぐ戻る羽目になるとは。今度から気をつけよう。

「さて、レッド寮は……ん？」

あたりを見回すと、こんな時間なのに明かりのついている場所があった。なんかやってんのか？

「原作でイベントとかあったっけ？」

かなりうつすらとした記憶をどうにか遡る。

えーっと、入学式の日っていうと……。

「おお、万丈目か！」

思い出した、まだ嫌な奴だったころの万丈目戦だ。

うーん、せつかくだし原作キャラの対戦は見たい。だが、警備員に見つかるリスクが……。面倒事は避けたいし……ん？ ちよっと待てよ。

「ああ、いや……いけるな」

そつだ、警備員に見つかったらとっておきの言いわけがあるじゃないか。

「鮎川先生さまさまだぜ」

寮に帰る途中で道に迷ったとでも言えばいいだろう。後は、鮎川先生を呼べば詳しい事情を説明してくれるはずだ。

「そうときまれば、いざデュエル場へ」

たぶん、あの明かりがついてる場所がデュエル場だろう。

たしか午前0時に始まるはずだから……うわ、もう始まるじゃねえか！

「急がねえと！」

現金なことに、自分に面倒事が降りかからないとわかった俺は、全速力でデュエル場へと向かった。

「決闘場にながれ、遊城 十代！」

「おう！」

意気揚々と答える十代の声が聞こえる。どうやら、今からデュエルが始まるらしい。

「ふう……間に合ったか」

いやー、よかった。ギリギリだった。

とりあえず、俺も部屋に入るか。おっと、一応通りかかったふりをしないとな。

「こんなところで何してんだ、お前ら？」

俺の声に反応して、その場の全員がこちらを向く。

「おー、いるいる。万丈目に取り巻き二人。十代と翔に明日香もいるな。あれ、明日香の隣にいるの……葵じゃね!? なんているんだよ！」

突然の来訪者に皆が驚く中（俺も驚く中）、最初に声を発したのは十代だった。

「あ　　っ!?　　獅音じゃねえか！」

「おーっす、十代」

「お前、体調はもういいのかよ!？」

「ああ、ばつちりだ。さっきは迷惑かけたみたいだな」

「そんなこと気にすんなよ、友達だろ？」

笑いながらそう言ってくれる十代。正直申し訳ない。今度絶対礼をするよ。

「本当に大丈夫なんスか、獅音君？」

近くにいた翔が、心配そうに尋ねてくる。ああ、こいつにも迷惑かけたな。

「まあな。お前にも迷惑かけたみたいだな、翔」

「いや、気にしなくて良いっすよ。でも、なんでこんなところに

いるんすか？」

「保健室から戻る途中でな。ここに明かりがついてたから、気になつて立ち寄つたんだ」

嘘は付いていない。

「そうなんすか。元気になつたみたいでなによりっす！」

「ああ、サンキユ。ついでに状況を説明してくれるか？」

「いや、実は……」

そう言つて状況を説明しだす翔。聞いた限りだと、原作と同じ事情のようだな。

まあ、つまるところ洗礼というわけだ。

「それで、こんな時間にデュエルか」

「そうっす！ 獅音君からもアニキに言つてやってくださいっす」

「わかった……。おい、十代」

「ん？ なんだよ獅音？ 言つとくけど、俺はデュエルを降りる気は……」

「知つてるよ」

翔には悪いが、デュエルを止めるつもりはない。

「だからな 絶対負けんなよ？」

「！…………おう！！ 当たり前だぜ！」

二カツと笑って頷く十代。うんうん、良い笑顔だ。

「ちよ、獅音君煽ってどうするんすか!？」

「いや、どうせ止まらんだろアイツ。だったら激励した方が良くないか？ 後、正直アイツのデュエルが見たい」

「最後のが本音つすよね!？」

「全部本音だよ」

少し建前が入ってるだけだ。

「…………まさか、止めるどころか煽るなんてね。彼のカードが奪われるかもしれないのよ？」

「いや、あいつなら平気だろ。てか、アンタは誰だ？」

知らないふりを装って、声の主に尋ねる。そこにいたのは、まばゆく輝く金髪の美少女。気が強そうなその表情からは、呆れと心配が感じられる。

見間違えようがない。この人は…………。

「ああ…………あなたには言ってなかったわね。わたしは天上院明日香よ。よろしく」

そう、GXのヒロイン、天上院明日香さんだ！  
いやー、できれば十代とは結ばれてほしかったなー、個人的に。  
まあ、遊戯王のヒロインだから仕方なかったかもしれんが。

「そうか、俺は如月獅音だ。忘れるなよ？」

「ええ、知っているわ」

あれ、知ってるの？ なんで？

「あそこの遊城十代と同じく、入試でクロノス先生を倒したんだもの。おまけに、とんでもないレアカードであるシンクロモンスターまで使った。アナタ今、学園ではちょっとした有名人よ？」

「うげ……」

マジかよ、迷惑な。

「失敗したな……目立ちたくなかったのに」

「試験前にあんなことをしておいて、それは無理でしょう？」

「ごもつとも」

うわー、本当まずった。ブルーのエリートに目を付けられなければいいけど。

「わたしもぜひ、デュエルしてもらいたいわね？ なんなら今からやりましようか？」



強気な笑みを浮かべながら、言ってくる明日香。おいおい。

「勘弁してくれ、天上院……」

「フフツ、冗談よ。それと、わたしのことは明日香でいいわ」

「なら俺のことも獅音で頼む」

うーん、なんか思ったよりもとっつきやすい奴だな。もつと男前で強気な奴かと思ってた。

「貴様、なにを馴れ馴れしく天上院君と話しているー!!」

「ああ?」

明日香と多少打ち解けたと思っていると、壇上から怒りに満ちた叫びが聞こえてきた。

振り返った声の先にいたのは鳥頭 否、万丈目だ。

「オシリスレッドの分際で、天上院君と話そうなd」ああ、そういえば葵。お前にも迷惑掛けたな。スマン、それとありがとう」「話を聞け、貴様!」

お前の話なんぞ、聞いてられるか。礼を言うほうが重要だ。

「……出来れば、もうちょっとタイミングを選んでもらいたかったんだけど」

突然話を振られたせいか、キョトンとしていた葵が苦笑しながら

呟く。うん、俺もこのタイミングはどうかと思った。

「まあ、善は急げというからな」

「にしても、もつとあつたでしょ？ いや、ていうか獅音君！

さつきから全然ボクの存在に触れないから、また無視してどこかに行くのかと思ったよ！ それと、目が覚めてたなら連絡くらいしてよ！」

「いや、時間が時間だったからな……明日にでも直接言おうかと思っただが」

「変なところで常識的だね！」

失礼な。俺は常識の塊だぞ？ ただ、守ることが少ないだけだ。

「にしても、本当に体調は大丈夫なの？ 昼間は意識がなかったみたいけど……」

「ばつちりだ。今なら勇次郎オウガとも戦える」

「それ健康がどうかじゃないよね!？」

まあ、あくまで戦えるだけであって、瞬殺されるけど。

「とまあ、こんな冗談が言える程度には健康だ」

「うん、たしかに心配はいらなそうだね……」

げんなりしながら葵が言う。なんだ、どっか悪いのか？

「まあ、とにかく治ってよかったな」

「自分で言っちゃった!? それボクのセリフ!」

「……あのー、獅音君? ちょっといいですか?」

「ん、なんだ翔?」

なんだか遠慮がちな様子で、翔が話しかけてくる。どうしたんだ?

「えーっとつすね……その、なんというか……」

どうにも煮え切らない様子の翔。見るに見かねたのが、今度は明日香が前に出てきた。

「アナタ達、知り合いだったの?」

「は? 知り合いって、俺と葵が?」

「ええ、さつきから当然のように話していたから気になってね」

ああ、たしかに傍から見れば何の接点もない二人だもんな。翔もそれが気になってたのか。

「そういえば、明日香にも話してなかったもんな。獅音君とは、試験会場で知り合ったんだよ」

「そうだったの? そういえば、葵もあのとき会場にいたんだっ  
たかしら。なんていうか……よくあの後で話しかけられたわね?」

あの後というのは、恐らくネクロフィアの惨劇のことだろう。どうやら、明日香でさえショックを受けたらしい。むしろ、普通に話しかけてきた葵や十代がすごいのか。

「アハハ……まあ、多少怖かったけどあれはソリッドビジョンのせいだしね。別に、カードを使った本人が怖い人物っていうわけじゃないから。実際に会ってみたら、けっこう面白い人でしょ？」

「フフツ、たしかにそうね」

おい、勝手に人を面白いキャラにするんじゃないやねえよ。

「けど、こんな有名人と知り合いになっていたんなら、教えてくれてもよかったんじゃない？」

「いや、言ってもよかったんだけど……男の子と知り合ったなんて言ったら、ももえあたりがうるさいかなって……」

「ああ……それはあるわね」

なにやら気まずそうな様子で二人が話している。ももえって誰だっけ？

いや、そんなことよりも。

「明日香と葵は知り合いだったのか？」

「あら、言ってなかったかしら？ 葵とは、中等部からの付き合いなのよ」

「なに？」

中等部からって……じゃあ、葵の奴はいつ転生したんだ？俺と同じタイミングじゃなかったのか？

葵に対して目で問いかけると、向こうも目で答えを返してきた。曰く、「後で話す」だそうだ。すげーな、アイコンタクトってマジで可能なのか。

「そうそう、まだ二人に訊きたいことがあるのだけれど」

「ん？」

「なにかな？」

「アナタ達」

「いいかげんにしろ貴様！！」

「……………あ？」

先ほどよりも大きな、それでいて怒りも三割くらい増していそうな叫びが、壇上から響き渡る。

そこにいたのは、さきほどよりもさらにヒートアップした万丈目。

「オシリスレッドのクズの分際で、天上院君だけでなく水無月君とまで……！ 許さんぞ貴様！」

「なんか言われてるぞ、翔」

「僕ツスカ!？」

「貴様のことだ、如月獅音!！」

あらら、名指しで指名されちゃったよ。

「そんなこと言われてもな……好きでレッドになったわけじゃないし、こいつらと知り合ったのも偶然なんだ。俺に文句を言われても困る。強いて言うなら、性格改善すれば明日香達と仲良くなれるんじゃない?」

「なっ、きさm「えーっ! いいじゃねえかレッド寮! 俺は気に言ってるぜ?」人の話に割り込むな!」

「まあ、お前は赤が似合うからな十代。俺、あんま似合わないから好きじゃねえんだよ」

「いや、獅音もけっこう似合ってるって!」

「マジでか?」

「話を逸らすな!！」

十代と話してたら一喝されてしまった。チッ、話を逸らすのは失敗か。面倒な。

「ボクもああやって話を逸らされたんだなあ……」

「葵、どうかしたの？」

「ううん、なんでもないよ……」

葵のぼやきが聞こえた気がするが気のせいだろう。

「で？ 一体なんだよ、万丈目」

「万丈目さんだ！！ ふん、今日は遊城十代を潰すだけにするつもりだったが、気が変わった。貴様も潰してやる！」

お、「言うことが小物くせえな」

「貴様あ……！！ 人を馬鹿にするのも大概にしろ！」

やべ、口に出しちゃった。

「決闘場にながれ、如月獅音！！」

「いや、十代とのデュエルも始まってないだろうが」

「タッグデュエルだ！ 貴様らまとめて叩き潰してやる！！」

「んだと？」

げ、マジかよ。結局面倒事に巻き込まれちゃったじゃねえか！  
いや、大丈夫だ。まだ逃げることは出来る筈。

「おおー！！ やったぜ、獅音とタッグか！ 面白いデュエルになりそうだぜ！」

逃げらんねー！！ 十代の輝く目を見たらもう、逃げるとか無理だ！

クツソ、まあこれくらいなら受けてやる。命が懸かってるわけじゃないし。

「お前のパートナーはどうするんだ万丈目」

「ふん、貴様に心配される必要はない！ おい、こっちに來い取巻！ 俺様と組め！」

万丈目に言われて慌てて決闘場に上がってくる取巻きの片割れ。おい、取巻って本名かよ。

「さあ、受けてもらおうか。言っておくが、このデュエルはアンティールだ。お互いにベストカードを賭けてもらう」

「ああ、わかってるぜ！」

「はあ……断れそうにないか」

アンティールは気がすすまんな。

おそらく、俺のカードで狙われるのは……。

「如月獅音、貴様には、当然シンクロモンスターを賭けてもらう！」



「やっぱりそつくるか……」

まあ、妥当なところだろう。手に入れたところでチューナーもないのに、どうする気だとは思うが。

「それじゃあ、俺達が勝ったときには……」

「ふん、そんなこと聞く必要はない。貴様らが勝つことはあり得ないんだからな」

「……ほっ」

ほっほーう。

今のセリフはカチンときたぜ？

「さあ、始めるぞ！ せいぜい足掻くんだな！」

「行くぞ、レッドの層ども！」

「へへっ、楽しいデュエルにしようぜ！」

「負けたときの言いわけを考えとけよ、自称エリート共……！」

叩き潰してやるよ……！！

「  
「  
「  
「  
デュエル!!  
「  
「  
「

第3話 体調最悪！！ 悲惨な一日、深夜の遭遇！（後書き）

はい、第3話でした。

獅音「いいかげんにデュエルしろよ」

葵「遊戯王の小説なんだから」

いや、書いてるうちに会話がどんどん増えちゃって……。

獅音「計画性がないな」

スイマセン……。

葵「まあ、それはいったん置いておこうか。それよりも、更新ペ  
ースだよ」

獅音「もうちょっと早くしろよ」

いや、今学校の課題がやばくって。

獅音「前にも言ったな。読者の皆さんには関係ない」

はい、言われました……。

葵「最悪月1のペースは守ろうよ。ていうか、文章量減らしたら  
いいんじゃない？」

それは考えたんだけど……これくらい書かないと、自分で納得で

きないんだよね。それに、量が多い方がお得かなって。

獅音「お前の読みにくい文が多くて、誰も喜ばんだろ」

ゲハアツ!?

葵「量より質だよ」

ゲフウ!

獅音「更新が遅くなったら、結果的に読者さんが離れていくしな」

ガハツ!!

葵「まあ、ようは今の量で早く書けてことだね」

はい……判りました……。

獅音「しかしまあ、タッグデュエルとはな」

葵「ちゃんと書けるの?」

うん……どうにかする……。

獅音「ま、久しぶりのデュエルだ。楽しませろよ、俺も読者さん  
も」

はい……わかってます……。

葵「うーん、なんか打ちのめされて使い物にならないね」

獅音「もとからだ、気にするな」

葵「そうだね。それじゃあ、ここまで読んでくれた皆さん、ありがとうございます！」

獅音「中々更新されない中、待っていてくれた読者のみなさんには、感謝してもしきれない。本当にありがとう」

葵「それでは。次回もボクはデュエルなし、ちよつとストレスが溜まってきた葵と」

獅音「取巻太陽のキャラがわからない、初期の万丈目マジでムカつく獅音がお送りしました」

葵・獅音「じゃあね〜!!」

葵「……ボクだってそろそろデュエルしたい……」

獅音「まあ、後で付き合ってやるから」

次回はデュエル回です！ お楽しみに？

葵「なんか復活してる!？」

#### 第4話 傲岸不遜！！ 輝く宝玉、十代の切り札！（前書き）

遅くなりましたああああっ！！ マジでスイマセン！！

獅音「懺悔はあとだ。とりあえず、この小説におけるタッグデュエルの説明をさせてもらおうぞ」

葵「基本的にはタッグフォースと同じで、ライフは8000。フィールドと墓地は共有で、パートナーのモンスターで攻撃や、生贄も可能です。セットしたカードは、基本的にそのカードの持ち主しか使用できませんが、通常魔法なんかは別です。また、最初のターンは全員攻撃不可で、カードガンナーのドロー効果など、タッグパートナーも恩恵を受けるカードがあります！……こんなところかな？」

はい。グツジョブです、二人とも。

獅音「なお、デュエル回と予告したにもかかわらず、会話と心理フェイズ多めだから注意してくれ。あと、若干タイトル詐欺だ」

葵「それでは第4話、始まります！！」

いやそれ、俺のセリフ！？

第4話 傲岸不遜！！ 輝く宝玉、十代の切り札！

前回のあらすじ

エリート（笑）に言いがかりをつけられ、十代と共にデュエルをすることになった獅音。果たして二人は、エリート（笑）に勝つことが出来るのか！

「誰がエリート（笑）だ!？」

「ど、どうしたんですか万丈目さん!？」



「うるさい、なんでもない!! ……くそっ、どこのどいつだ…  
…!!」

突然叫びだした万丈目に慌てる取巻。万丈目の方は、取巻を怒鳴りつけた後しばらく周辺を見回していた。

まさか、原作キャラにメタな突っ込みをさせるとは……大丈夫か、こんなことして?

「なあ、獅音。万丈目の奴、どうかしたのか?」

万丈目の様子を見て疑問に思ったのか、不思議そうな顔をした十代が訊いてくる。うん、お前は知らんでいい。

「気にするな。ああやって突然奇行に走るのは、中二病患者にはよくあることだ」

「チュウニビョウ? なんだそれ、万丈目の奴病気なのか?」

「中二病とは、思春期の少年少女にありがちな自意識過剰やコンプレックスから発する一部の言動傾向を小児病とからめ」

「何を勝手なことを言っているんだ貴様ら!?!」

十代に中二病について説明していたら、万丈目にキレられた。チツ、聞こえたか。

「俺は中二病なんかでh「いいから、とつとと始めるよ。お前のターンからだぞ」きっさまあ……!!」

ものすごい形相で、万丈目の奴が睨んでくる。おいおい、ちょっと話を遮ったくらいで怒るなよ。まあ、怒らせるためにやったんだが。

あ、良い子のみんなは対戦相手を挑発したりするなよ？ 下手したら友達なくすからな。

「後悔させてやるぞ、レッドのクズが！ 俺のターン、ドロー！俺は、手札から『リボーン・ゾンビ』を守備表示で召喚！」

『リボーン・ゾンビ』

レベル4 闇属性 アンデット族 ATK/DEF 1000/  
1600

いや、こいつで後悔させられたらお前スゲーよ。

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ！」

万丈目・取巻 LP 8000

手札 万丈目/取巻 4枚/5枚

モンスター 『リボーン・ゾンビ』

魔法・罠 1枚

まあまあ、無難な出だしだ……と言いたいんだが、突っ込んでもいいか？

なぜ、『リボーン・ゾンビ』!?

いや、『リボーン・ゾンビ』愛好家の人たち（いるか知らんが）には悪いが、アンデット族なら他にいくらかでも良いカードがあっただろ!？ まあ、原作通りなら本命はあの伏せカードだから、モン

スターはなんでも良かったんだろうが……それにしたってなあ。

「えっと、明日香さん。あの『リボーン・ゾンビ』ってどんなカードなんスか？」

『リボーン・ゾンビ』を知らなかったのだろう、翔が明日香にそんなことを尋ねる声が聞こえた。まあ、マイナーなカードだし知らなくても仕方ないか。

「あのカードは、自分の手札が0枚の場合に攻撃表示で存在する限り、戦闘では破壊されないモンスターよ」

「ええっ！？ 戦闘で破壊されないって、そんなのずるいっす！」

わかりやすい説明ありがとう、明日香。それと翔、あの程度でするいならば、世の中極悪といわれるカードで溢れかえるぞ。

「ずるいって言うほどのカードじゃないよ、丸藤君。あれは戦闘破壊耐性を持つカードの中では、ものすごく扱いづらい部類のカードだからね」

そんなことを思っているところに、葵からの説明が入る。

よく言ってくれた。さすがに『リボーン・ゾンビ』をずるいカードと思っていいたら、この先思いやられるからな。

「え、そうなんスか？」

「そうね、戦闘破壊耐性を持つカードなら他にもあるわ。種族にこだわらなければ、1000ポイントのバーンがついてくる『マシ

ユマロン』が。同じアンデット族にも、自壊効果やステータスこそ劣っているものの、ハンデス効果を持つ『魂を削る死霊』なんかがいるわ」

明日香からも、より具体的な説明が入る。うん、これだけ言えば翔も判ってくれるだろ。

「それらに比べれば、攻撃表示で尚且つ手札0枚でなければいけないあのカードは……さしずめ、サンドバッグと言ったところかしら?」

いや、言いすぎじゃね明日香!?

「そこまで言うんすか!？」

「天上院君!？」

翔も驚いてるよ!？ 万丈目に至っては、自分のカードだから若干涙目だよ!？ 葵の奴も苦笑してるし!! オベリスクブルーの女王マジ怖い!!

まあ、サンドバッグというのは否定出来んのが悲しいがな!!

「もうちょっと、オブライトに包もうよ明日香……。にしても、ここまでは原作通り……。じゃあ、あの伏せカードは……遊城君にはマズイかな」

「どうかしたの、葵?」

「ふえ!？ い、いやなんでもないよ?」

「（この娘、本当に隠し事下手ね……）そう、ならいいけど」

葵よ……こつちまで会話の内容が聞こえてるぞ。原作通りとか言っちゃダメだろ。こんなんでよく、今まで明日香とかに正体バレなかつたな。

しかし、あの伏せカードが原作通りならば、たしかにマズイ。

（『ヘル・ポリマー』か……）

効果はそこそこ強力だが、メインからデッキに投入するには少々汎用性が低いカードだ。少なくとも、シンクロやエクシーズが普及していた元の世界では、滅多に見ることがなかった。

が、相手が十代ならば話は変わってくる。

融合召喚がメインのうえ、当然のように初手で融合ができる十代が相手ならば、これほど強力なメタカードもないだろう。

（まあ、俺なら弾圧入れるんだが……つっても、ライフ4000のこの世界じゃ、おいそれとは乱発出来んか）

そういう意味でも、『ヘル・ポリマー』はこつちでは中々に優秀なメタとなる。融合主体の奴が多いしな、GX。なぜかこのデュエル以降、まったく使われてないが。おい、クリスティアでOKとか言うな。

さて、どうするか。十代に注意をしたいとこだが、タッグデュエルでのパートナーに対するアドバースはマナー違反……ってかルール違反だしな。

「へへっ、獅音とのタッグデュエルか、ワクワクするぜ！！俺のターン、ドロー！」

マズイ、考えてる間に十代のターンが始まってしまった。いや、でもさすがに初手で融合は……。

「よっしゃあ！俺は、手札から『融合』を発動！手札の『E・HEROバーストレディ』と『E・HEROフェザーマン』を融合し現れる！！『E・HEROフレイム・ウイングマン』！！」

『E・HEROフレイム・ウイングマン』  
レベル6 風属性 戦士族 ATK/DEF 2100/1200

するんだもんなあ、お前！！

しかも、融合素材の緩いゼロやガイアではなくフレイム・ウイングマン。まさか、サーチも融合代用モンスターも使わずに、初手から切り札を出すとは……主人公補正、恐るべし。さすが、マイフェイバリットカードと言っただけあるな。

と、そこまで考えて、不意になにかが引っ掛かった。

なんだ？今、たしかに小さな違和感を感じたぞ。気のせいかな？

「かかったな、馬鹿め！俺はこの瞬間、セットしていた畏カード『ヘル・ポリマー』を発動する！！」

思考を遮るように、万丈目の声が響く。

どうやら悠長に考えている時間は、与えてくれないようだ。

にしても、マジで『ヘル・ポリマー』かよ！

「なんだ、そのカード？」

『ヘル・ポリマー』を見たことがなかったのか、香気に十代が問  
いかける。

たしかに、メジャーなカードというにはアレだが……十代、自分  
が使うデッキに対するメタカードくらい知っておけ！！あと、状  
況はだいぶ悪いからな！？

「このカードは、相手が融合モンスターを融合召喚したときに発  
動することができる。俺のフィールドに存在するモンスター1体を  
生贄にすることで、その融合モンスターのコントロールを得ること  
ができるのだ！」

「いいっ！？マジかよ！？」

「フハハ、貴様のモンスターはいただくぞ！！」

その言葉とともに、亡霊のような炎がフレイム・ウィングマン目  
掛けて襲いかかる。振り払おうと抵抗を試みるが、炎は一向に離れ  
ない。そして、やがてそれはフレイム・ウィングマンの全身へと絡  
みついた。

「フレイム・ウィングマン！！」

苦悶の表情を浮かべるフレイム・ウィングマンに、十代が悲痛な  
叫びを上げる。だが、無情にも炎に捕らわれ、フレイム・ウィング  
マンは万丈目のフィールドへと移ってしまった。

ああ……こうしてみると、コントロール奪取って腹立つよなあ。  
苦労して召喚したモンスターを奪われた時の、あのやるせなさ絶  
望感！

そしてなによりも……

「ハーツハツハツハ！ 伏せカードも警戒しないとは、流石は  
オシリスレッドだな！！」

あのだや顔がうぜえ！！

「奪ってやったぜ、ざまあみる！！」と言わんばかりの、あの顔  
！ 正直、今すぐデュエリスト止めてリアリストになりたいところ  
だ。デュエルディスク投げつけるぞ、コラ！

「くつ、俺は『E・HEROクレイマン』を召喚。カードを一枚  
セットして、ターンエンドだ」

『E・HEROクレイマン』  
レベル4 地属性 戦士族 ATK/DEF 8000/2000

おい、守備表示じゃなくて大丈夫か？

十代・獅音 LP 8000  
手札 十代/獅音 1枚/5枚  
モンスター 『E・HEROクレイマン』  
魔法・罠 1枚

フィールドだけ見れば、相手とカード枚数はさほど変わらない。  
だが、ハンドアドバンテージがやばい。おまけに手札3枚使って、  
相手に強力なモンスターを与えてしまったとあっては笑えない状況



だ。

「悪い、獅音！ 足引つ張っちまった！」

おそらく自分でもマズイと思ったのだろう。パン！ と手を合わせて、申し訳なさそうに十代が謝ってくる。

こうやって、自分が悪いと思っただけで謝れるところは十代の良いところだな。元の世界の友人なんかは、こんな状況になると「後は任せませ！」と言って、丸投げしやがるからな。あ、やばい。思い出したら腹立ってきた。

大体あの野郎、毎度面倒なデッキを使いやがって……ガン伏せした剣闘獣は、軽くトラウマだよ！ 鳥と戦車なんざ大嫌いだ！ 他のデッキにしても、無限ハンデスとか先攻で決めるんだぞ？ こっちの手札一枚からスタートとか、ふざける！！ あいつと戦うために、ネタデッキを実戦レベルまで上げるのがどれだけ大変だったか……！！ そして、その苦勞を嘲笑うかのようなガチカード！ 切り札を出したときに「はい、奈落」「悪い、神宣」「はっはっは、神警」だぞ！？ 思わず叫びだしそうになったわ！！ もう、あの時の感情はなんて言えば良いんだろう……一割の切なさ、九割の殺意だろうか。この気持ち判る奴、拳手！！ 「いや、もつと酷い目にあつたことがあるぜ！」という方、泣いてもいいぞ！ ていうか、マジで腹立ってきたわ！ ちょっと、どうしようかこの怒り！！ 誰にぶつけたらいいと思う！？

「し、獅音！？ なんか、すげー顔になつてるけど大丈夫か！？」

そんな感じですよ。昔を思い出していると、隣にいる十代から若干怯え気味に声をかけられた。見れば、向かいにいる万丈目と取巻も顔が青くなっている。どうやら、自分でも気付かない間にすごい

顔になつていたらしい。

いかな、以前もこれで同級生を怯えさせてしまったというのに……。腹が立つとつい、無意識のうちはこの顔になつてしまう。ちなみに友人曰く、「あの顔は人間ではない。もはや闇マリク並みの顔芸」とのことだ。

「本当に悪い……。獅音のカードまで懸かっているのに、こんなミスしちゃって」

などと思っていると、さらに申し訳なさそうに十代が謝罪を重ねる。どうも俺の顔を見て、俺が十代のミスについてもすごく怒っているんだと思つたらしい。

いや、お前に対しては怒ってないから！ 俺の顔、そんなに怖かった！？

そもそもこんなの、ミスとも言えないくらいのことだ。序盤なんだから、伏せカードなんか気にせず攻めるくらいの方がいい。そのうえ、ちゃんと十代は謝つたんだ。さすがに、これで怒りをぶつけるほど俺も馬鹿じゃない。むしろ無駄に怖がらせた分、俺が謝つた方がよくない？。

「気にするな、十代。別にお前に怒つたわけじゃない」

「え、でもあの顔はどう見ても怒ってたぜ？」

「思い出し怒りだ」

「そんな言葉初めて聞いたツス！」「いったいどんな顔だったのかしら……」「遊城君だけじゃなくて、万丈目君達まで怯えるって

相当だよな……」などという声が、後ろから聞こえてくるが無視。

「これはタッグデュエルだ、お前のミスは俺がフォローしてやる。だから、俺がミスしたときは頼むぞ十代？」

「獅音……。おうっ、わかったぜ!!」

そう言って、明るい顔で十代が笑う。よし、大丈夫みたいだ。落ち込んでる十代なんて、調子が狂うからな。

ていうか、マジで頼むぞ十代。最後はお前のドローに懸かっている気がするからな。あと、怖い顔しちゃってマジごめん。

しかし、このやり場のない怒りはどうしてくれようか。

「ふん、長話は終わったか」

若干イライラした様子の万丈目が話しかけてくる。おっと、待たせたようだな。

……………あ、怒りをぶつける相手、いたわ。

「見ての通りだ。そっちのターンだぞ」

まあ、それについては俺のターンが来てから考えよう。さて、次は取巻か。こいつはどんなデッキなんだ？

「俺のターン、ドロー！俺は、『サファイアドラゴン』を攻撃表示で召喚」

『サファイアドラゴン』  
レベル4 風属性 ドラゴン族 ATK/DEF 1900/1600

お、普通に強いぞ。少なくとも『リボーン・ゾンビ』よりは強力だ。にしても、こいつ声たけーな。

「さらに、俺は装備魔法『デーモンの斧』を『サファイアドラゴン』に装備！カードを一枚セットして、ターンエンド」

なん……だと……！？

『サファイアドラゴン』

ATK/DEF 1900/1600 2900/1600

万丈目・取巻 LP 8000

手札 万丈目/取巻 4枚/3枚

モンスター 『リボーン・ゾンビ』 『サファイアドラゴン』

魔法・罫 2枚

やべえ、超なついわこの光景！

『サファイアドラゴン』に『デーモンの斧』とか、今となっては滅多に見れないぜ。

「……でた、取巻さんのマジックコンボだ（ボソッ）」

「何か言ったかしら、葵？」

「う、ううん！ なにも言っていないよ！」

嘘つけ。それと、マジックコンボ言うな。いや、俺も思ったけどな？

「そんな……攻撃力2900のモンスターなんて、どうしたらいいんすか！？」

「どうにでもなるわね」

「クール過ぎるよ明日香……まあ、たしかになるけど」

社長の嫁一步手前となった『サファイアドラゴン』を見て、三者三様の感想を口にする葵達。明日香、冷静すぎて怖い。

それと翔。機械族使いが、この程度の攻撃力で驚くんじゃない。大体お前の兄貴はもつとすごいだろ。実の兄貴にしても……

「すっげー、攻撃力2900か！！ くうく、ワクワクしてきたぜ！」

こつちのアニキにしても。卒業デュエルの、あの攻撃力は遊戯王史上最高クラスだぞ？

「おい、貴様のターンだぞー！！」

おつ、やっと俺のターンか。にしても、万丈目の奴「イライラしすぎだな。カルシウム取れば？」

「貴様あ！！ 誰のせいだと思っている！？」

あれ、もしかしてまた口に出しちゃった？

「いや、ほんとカルシウム取った方がいいぞ。それで穏やかになつたら、もつと人望も厚くなるんじゃないね」

「余計な御世話だ！？ いいから、早く進めろ！！」

あー、どうも火に油を注いだらしい。目がとんがってやがる。やれやれ……。

「まったく、人の親切を何だと思っているんだ……」

「貴様のどこがしんせ「俺のターン、ドロー」言ったそばからこれか！？」

当然だ、お前の話なんて聞いてられるか。こっちは、やり場のない怒りをぶつ付けてくたくたウズウズしてるぜ！ エリートのプライドをへし折る気も満々だぜ！ もう、頭の中で処刑用BGMが流れ出しそうだぜ！！

そんな感じで、テンションと殺る気は最高潮だ！

とはいえ実際問題、俺の悪魔族デッキの展開力は微妙だ。正直、事故らなければ御の字と言ったところだろう。え？ クロノスのときは回ってたって？ 断言しよう、ありや奇跡だよ。

まあ、とりあえずは初手次第だな。さてさて、俺の手札は……

.....あるえ？

「What's happen!？」

「なんで英語ツスか!？」

「突っ込むところはそこなの!？」

「おおっ！ 獅音、英語しゃべれるのか!！」

「あなたも突っ込みどころがおかしいわよ、遊城十代」

どうも周りでツッコミの連鎖が起きているようだが、今の俺にツッコミ返す余裕はない。そんな場合では、ない！ ちょっと待て、どういうことだこれ！？

たしかに、これは俺が元の世界で使っていたデッキだ。お気に入りデッキでもある。それに、この世界には向いている。おそらく十代あたりはかなり喜ぶだろう。だが、これは……。

悪魔族デッキじゃねえ！？

手札に在るカードのほとんどが、悪魔族デッキには入っていない筈のないカード達。おかしい、なぜだ。

試験の後、自分のカードを確認したが、俺が持っていたのは悪魔族デッキと数枚のシンクロモンスターが入ったエクストラデッキだけだったはずだ。他のデッキはおろか、サイドもろくに持っていなかったから、10分ほど絶望した覚えがある。

ましてや、このデッキは普通のエクストラデッキ 少なくとも俺の悪魔族デッキで使用する とは、まったく別の構築じゃなければ戦えない。そして、もしこのデッキに必要なエクストラを持っていたなら、あの時に見逃すはずがない。だが、このデッキがあるとなると……。

俺は、まさかと思いながらもデッキホルダーをあけてエクストラデッキを確認した。すると、そこには……





『スマン、エクストラデッキは間に合わなかったわ(笑)』

ああ、なるほど。

そうか、間に合わなかったのか……。じゃあ、仕方ないな。

「なんて言うか、ボケエエエツツ!!」

「『『『『』なにが!?』』』』」

俺の絶叫に一同総ツツコミ!! 発言の少ない取巻ですら、ツツコミやがった!! いや、たしかにみんなからすれば意味が解らんだろう。しかし、あえて言わしてもらおう! 一番ツツコミたいのは俺だよ!!

間に合わなかったって何!? つーかこれ書いたの誰!? そして、(笑)がマジ腹立つ!!

なんだ、もしかして俺をここに送り込んだ奴の仕業か!? だとしたら、ほんと殴りたいわ!! ここに来た時といい、所持金といい中途半端な真似しやがって! エクストラないなら、他のデッキ送ってくれよ!? エクストラ使わないデッキもあつただろ!?! 暗黒界とかスキドレ次元とか!!

……いや、その二つは酷いな。ちょっと引くくらいガチ仕様にしてあるし。少なくとも、野試合では使わないからなあ……。

にしても、それ以外にもあつただろうが! 悪魔族とエクストラが共有できるシンクロデッキがさあ!!

いや、しかし冷静になれ。一応戦う手段はある!! 苦肉の策だが、最悪の事態に陥った時でも戦えるためのギミックが、このデッ

キには仕込んである！！　そしてこの手札ならば、そのギミックを使うことができる！！　ほとんどネタで仕込んだから、まさか使うとは思わなかったがな！！

だが、けっこう綱渡りな感じだな……これ、除去カード一枚で終わるぞ。さて、どうしたものか？

「おい、何をしている！！　とつとと貴様のターンを進めろ！」

「ああ！？　うるせえぞ鳥頭、擦じり切るぞ！？」

「な、なに！？」

俺の若干アレな発言を聞いて、「し、獅音君が怖いっす！！」「一気にガラが悪くなったわね」「いったい何があつたんだろうね……」などと後ろで色々言われているが無視！　人が必死で打開策を考えてるときに、話しかけんじゃねえよ鳥頭！　イラツとくるぜ！！

……よし。言いたいことを言つて、ちよつとネタを挟んだら、だいぶ落ち着いてきたぞ。え？　さっきの発言？　ああ、万丈目に対するあれね。あれは八つ当たりだよ？　ごめんね、万丈目。（悪びれていない）

さて、それじゃアターンを進めるとしよう。つっても、この状況じゃほとんど選択肢はないんだが。

「俺はモンスターをセット。さらにカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

十代・獅音　LP　8000

手札　十代／獅音　1枚／4枚

モンスター 『E・HEROクレイマン』 セットモンスター  
魔法・罠 2枚

さてさて、どうなるか。モンスターを除去されると、俺は相当苦しいが。

「ふ、ふん！ 威勢が良かった割には、たいしたことないな！」

若干どもりながらも、嫌味を言ってくる万丈目。よく見ると、少し顔が青い。

やれやれ、さっきのでびりながらも嫌味を言うとは……いい度胸だな、エリートの誇りってやつか？ ま、馬鹿みたいなプライドでも虚勢を張れるだけマシか。

「ああ？ 黙れよ、筆るぞ」

無論、だからどうしたという話だが。

「くっ……！ くそっ、俺のターン、ドロー！！ 俺は、手札から『地獄戦士』を召喚！！」

『地獄戦士』

レベル4 闇属性 戦士族 ATK/DEF 1200/1400

こいつ、アマゾネスでも良くね？

「バトルフェイズ！！ まずは貴様だ、遊城十代！！ 俺は、フレイム・ウィングマンでクレイマンに攻撃！」

右腕の竜の頭のようなモノから、炎を出して襲いかかるフレイム・

ウィングマン。お前、なんで風属性だよ。

そして、攻撃をされた当の十代の顔は 笑顔。

「へへっ、それを待ってたぜ!!」

「なんだと!？」

「俺は、リバースカードを発動! 罨カード『異次元トンネル・ミラーゲート』!!」

カードの発動と共に、一瞬左右が反転した錯覚にとられる。そして、そのあとにフィールドに起きた変化は、一見何もない。さっきと同じように、戦闘を行おうとしているフレイム・ウィングマンとクレイマンがいるだけだ。

しかし、そこには決定的な違いがある。

「ええ!？ なんでツスカ!？」

フィールドを見た翔が驚きの声を上げる。お前、今日驚いてばっかだぞ。

そして、対面にいる万丈目もまた、目を見開いて驚愕の声を発した。

「馬鹿な!？ なぜ貴様らのフィールドにそいつがいる!？」

そう。俺たちのフィールドには、さっきまで攻撃を行おうとしていたフレイム・ウィングマンの姿が、逆に万丈目達のフィールドには、クレイマンの姿があった。

いやはや……予想はしていたが、ミラーゲートか。こんなカードをピンポイントで使えるあたり、やっぱり主人公ってのはすごいな。

「『異次元トンネル・ミラーゲート』の効果だ！ このカードは、俺のフィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついたモンスターを攻撃対象にした、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手の攻撃モンスターと攻撃対象となった俺のモンスターのコントロールを入れ替えてダメージ計算を行うぜ！」

「なんだと!?!」

「いくぜ!! 迎え撃て、フレイム・ウィングマン！」

万丈目が慌てているが、もはや遅い。コントロールが入れ替わったクレイマンは、なす術無くフレイム・ウィングマンに破壊された。

万丈目・取巻 LP 8000 6700

「くそっ!?!」

「さらに、フレイム・ウィングマンの効果でダメージを受けてもらっぜ！」

万丈目・取巻 LP 6700 5900

「そして、俺はこのターンのエンドフェイズ時まで、コントロールを入れ替えたモンスターのコントロールを得る！」

よし、これでダメージを与えたうえで追撃を迷わせることができ

る。しかし、こういう光景を見るとミラーゲートが強く見える不思議。実際には、HEROデッキでも滅多に使われないカードなんだが。

「この、オシリスレッド風情が……！！ よくもやってくれたな！」

「いや、伏せカードを警戒しなかったお前が悪いだろ」

「なにっ!？」

「なにっ、じゃねえよ。攻撃力の低いモンスターをわざわざ攻撃表示で出したんだ、なんもないわけないだろ」

そもそも、お前だって似たようなことやってただろうが。

「しかし、伏せカードも警戒しないとは……さすがは、オベリススクブルーのエリートだな？」

「なっ……!？」

「まあ、今度からは、魔法・罫であれ、モンスターであれセットされたカードには気をつけた方がいいぞ。モンスターの場合、リバーすると発動する効果もあるからな」

「そんなことは知っている!! 貴様、どこまで人を馬鹿にすれば気が済むんだ!？」

「どこまでもだ」

「きさ」ほら、まだお前のバトルフェイスだぞ。はやくしてくれ  
うがぁー!？」

度重なる挑発に怒りが限界まで到達したのか、奇声を発する万丈  
目。お、いい感じに壊れてきたな。

「獅音君、鬼っすね……」

「けど、言っていることは正論ね」

「だから余計に腹が立つんじゃないかな？　なにせよ、獅音君  
は心理戦のエキスパートかもね……」

後ろで勝手な会話が繰り広げられているが、別にそんなことはな  
いぞ？　ただ、少しだけ相手の顔色を読むのが得意なだけだ。まあ、  
今の万丈目相手なら誰でも挑発出来ると思うが。

「俺は地獄戦士で裏守備モンスターに攻撃！！　死ね、如月獅音  
……」

「いや、俺は死なねーよ!？」

もう完全に冷静さを欠いているであろう万丈目の命令で、俺ごと  
倒す勢いでセットモンスターに攻撃を仕掛ける地獄戦士。ちよつと  
怖いわ。

だが、これでいい。

「やれやれ、さつき伏せには警戒しろと言ったんだがな……それ  
が、たとえモンスターであろうと」



「なっ……まさか、貴様!？」

今更になって、その可能性に気付いたのだらう。だが、もう遅い。

「言った筈だ、リバーズすることで効果を発動するモンスターもいると。攻撃を受けたことで、俺のモンスターはリバーズする。姿を現せ！」

まったく、除去られたらどうしようかと思っただぜ。

「『ジエムタートル』!?!」

現れたのは、宝石製の甲羅を背負った亀。

……あ、これ以上の説明はねえよ？ ガイウスのと看みたいな説明は、こいつにはちよつと無理だわ。外見がシンプル過ぎるんだもん。

『ジエムタートル』

レベル4 地属性 岩石族 ATK/DEF 0/2000

「おおっ!! すげー、きれいな亀だな!」

「見たことないモンスターっス!」

「また、珍しいカードかしら……」

「説明は後でしてやる。とりあえず、コイツの効果を発動だ。このカードがリバーズしたとき、デッキから『ジエムナイト・フュー

『ジヨン』を手札に加えることができる。任意効果だが、当然俺はデッキから『ジエムナイト・フュージョン』を手札に加える」

「いやー、危なかった。こいつがいなかったら、マジでなんもできなかったぜ。」

「あ、ついでに反射ダメージもくらっとけ」

万丈目・取巻 LP 5900 5100

「くそっ、まさかリバー効果とは……………」

苦々しげな顔で、万丈目が呻く。いやいや……………。

「散々注意しただろ」

「あんなこと言われた後に、本当にリバー効果とは思わんだろ  
うが!？」

そりゃ、それが狙いだからな。なんのための挑発だと思ってるんだ。

「獅音君、やっぱり心理戦のエキスパートなんじゃ……………」

「いや違うから」

それは十代だけで十分だ。

「ま、それよりどうすんだ万丈目。まだ攻撃するか? 正直ダメージはくらいたくないから、もう止めとけば?」

「だれが止めるか！ そんなに嫌なら、くらわしてやる！ 俺はサファイアドラゴンで、フレイム・ウィングマンに攻撃する！」

社長の嫁クラスとなったサファイアドラゴンに、斧で叩き切られるフレイム・ウィングマン。くく、計画通り……。

十代・獅音 LP 8000 7200

「あー。これは獅音君に乗せられちゃったね、万丈目君」

「え、どういうことですか？」

「『異次元トンネル・ミラーゲート』の効果でコントロールを得られるのは、あくまでエンドフェイズまで。それを過ぎたら、また万丈目君たちのフィールドに戻ってしまうの。それが嫌だったから、獅音はダメージ覚悟で攻撃させるように誘導したんでしょうね」

「えーっ！？ ホントですか獅音君！」

「まあな」

正解だ、明日香。しかしまあ、面白いくらいに引っかけてくれたな。

「そんなわけだ、おつかれ万丈目」

「ぐああー！？ くそっ、俺はこれでターンを終了だ！！」

万丈目・取巻 LP 5100

手札 万丈目/取巻 4枚/3枚

モンスター 『地獄戦士』 『サファイアドラゴン』  
魔法・罠 2枚

「悪いな、十代。勝手にお前のモンスターを利用しちゃまって」

「そんなこと気にすんなって！ おかげで助かったしな！」

「そういつてもらえると助かる」

最善の策だったとは思いますが、十代のモンスター二体とも破壊しちゃったから、ちよつと罪悪感がね。

「それじゃあ、俺のターンだぜ！ ドロー！」

引いたカードと手札を見て、にらめっこを始める十代。いったい手札二枚から何を見せてくれるんだ？

「よし、俺は手札から『カードガンナー』を召喚！」

『カードガンナー』

レベル3 地属性 機械族 ATK/DEF 400/400

よし、悪くない。

「面倒なカードを………！」

苛立たしげに吐き捨てる万丈目。いや、おそらくお前が思っている倍は面倒だぞ。

「『カードガンナー』の効果発動！ 1ターンに1度、デッキの

上からカードを三枚まで墓地へ送り、送った枚数×500ポイント  
このカードの攻撃力をアップする。俺はデッキからカードを三枚墓  
地へ送って、攻撃力を1500ポイントアップするぜ！」

『カードガンナー』

ATK/DEF 400/400 1900/400

さすがは元制限カード、強いなあコイツ。墓地を肥やしつつアタ  
ッカーになるし、奈落にかかんないからな。

なおかつ、使ったのが十代だ。確実にいいカードが落ちているは  
ず！

「バトルフェイズ、俺はカードガンナーで地獄戦士に攻撃するぜ  
！」

いや、ちゃんと相手のカード効果を読んでおけ十代！？ そいつ  
はめんどくせーぞ！

などと思っても攻撃が止まるはずもなく、あっけなく地獄戦士は  
破壊される。

万丈目・取巻 LP 5100 4400

「チツ！ だが、ただでは死なん！ 破壊された地獄戦士の効果  
が発動する！！ このカードが戦闘で破壊されたとき、俺が受けた  
のと同じダメージを相手に与える！！ 地獄からの刃をくらえ！！」

万丈目の声に応じて、地獄戦士の剣が俺たち目掛けて飛んでくる。  
これはさすがに躲せない。

十代・獅音 LP 7200 6500

「やべ、またやつちまった．．．．．獅音わりい！」

「気にするな、モンスターを減らしたのに変わりはない」

ただ、効果のテキストくらいは確認しておいてほしいが．．．．．  
まあ、この世界では相手の効果を確認しないのが常識みたいな感じだもんな。仕方ないか。

「それじゃあ、俺はこれでターンエンドだ！ カードガンナーの攻撃力は元に戻るぜ」

『カードガンナー』

ATK/DEF 1900/400 400/400

十代・獅音 LP 6500

手札 十代/獅音 1枚/4枚

モンスター 『ジエムタイトル』 『カードガンナー』

魔法・罨 1枚

「俺のターン、ドロ！ 俺は、『ミラージュ・ドラゴン』を召喚」

『ミラージュ・ドラゴン』

レベル4 光属性 ドラゴン族 ATK/DEF 1600/6

00

おい、ただのモブかと思ったらこいつ意外と厄介だぞ。現状、万丈目より強くないか？

「俺はサファイアドラゴンで、ジェムタートルに攻撃！」

「ちっ………!!」

どうにもならん。やはり、なんだかんだで攻撃力2900はきついな。

「さらに、ミラージユドラゴンでカードガンナーに攻撃！ このカードが表側表示で存在するとき、相手はバトルフェイズに罠カードを発動できない！」

知つとる。それに、どうせ止められん。

十代・獅音 LP 6500 5300

カードガンナーは、アタッカーにすると低攻撃力をさらしてしまふのがキツイな。まあ、十分優秀だが。

「カードガンナーの効果発動！ このカードが破壊され墓地へ送られたとき、俺はカードを一枚ドロウするぜ！」

「今回はタッグデュエルだから、俺もドロウさせてもらおう」

破壊されても役に立つとか、素晴らしいよね。

「俺は、カードを一枚伏せてターンエンド」

万丈目・取巻 LP 4400

手札 万丈目/取巻 4枚/1枚

モンスター 『ミラージユドラゴン』 『サファイアドラゴン』

魔法・罨 3枚

ふむ……こいつ、マジで万丈目より強くないか。なんか、無難にやるぞ。派手さが無い分、穴が少ない。特殊召喚を多用する十代とは正反対だ。

「やつかいだが、どうにかせんとな……俺のターン、ドロー」

とりあえず、引いたカードを確認する。

よし、……いける！

「俺は『スナイプストーカー』を召喚」

『スナイプストーカー』

レベル4 闇属性 悪魔族 ATK/DEF 1500/600

来ました、万能除去！ 出されるとイラッとするが、地味に強いぜ。

特に、今はな。

「さらに魔法カード『手札抹殺』を発動。お互いのプレイヤーは、手札をすべて捨ててその枚数分ドローする」

ちなみに、今回はプレイヤー全員が対象となる。よって、十代や万丈目も捨てなければならない。

「ふん、手札交換とはよほど手札が悪かったのか？」

「黙って引け、鳥頭」



「だから鳥頭ではない！ ……ふん、言われなくても引いてやる！」

全員が手札を引き終わったのを見て、ターンを進める。

さあ、このデッキの本領（？）発揮だ……！！

「それじゃあ俺は、手札から墓地へ送られた『ジエムナイト・オプシディア』の効果を発動！ 墓地のレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚する！ 俺は、『ジエムナイト・アンバー』を特殊召喚！」

『ジエムナイト・アンバー』  
レベル4 地属性 雷族 ATK/DEF 1600/1400

「ジエムナイトだと！？ なんだそのモンスターは……！」

「おおっ！！ かつこいいな、ヒーローみたいだぜ……！」

「兄貴が好きそうなモンスターツスね……けど、見たことないカードツス」

「ジエムナイト……たしか、さっき手札に加えていたカードも同じ名前がついてたわね。なにか関係があるのかしら？」

「まあ、面白いものが見られるんじゃないかな？ 入学試験の時みたいにね。（ジエムナイトも持ってたんだ……にしても、目立つカード使うなあ……）」

俺の召喚したモンスターを見て、全員が全員違う感想を口にする。

やはり、十代にはうけたようだ。そして明日香、本当に良い読みしてるな。

「まあ、まずは邪魔なカードを掃除するでしょうか。俺は、手札を一枚捨てて『スナイプストーカー』」

の効果を発動！ フィールド上のカードを選択して、サイコロを振り1か6以外が出たなら、選択したカードを破壊する！

「チツ……どこを選択する！」

「当然サファイアドラゴンだ！ いくぞ、ダイスロール！」

「いや、それ別のゲームじゃない!?」という葵のツツコミは聞かなかつたことにして、ソリッドビジョンのサイコロが回転する。

段々とその回転が弱まっていき、最後に出た目は……。

「ハハハ、こいつは傑作だな!!」

「……」

サイコロを見た万丈目の嘲笑が癪に障る。

出た目は、1だった。

「……まだ、俺の手札は残っている。再び『スナイプストーカー』の効果を発動！ 対象はサファイアドラゴン！」

手札を一枚捨て、再びサイコロが回転する。次に出た目は……

6。

「マジでか……」

確立三分の二で、二回連続で外すとは……。俺、ついてなすぎだろ！

「流石はオシリスレッドのクズだな、ここにきて運に見放されるとは……！」

「うっせーな、鳥頭。いいんだよ別に」

「ふん、負け惜しみか！」

「いや……実際これでいい。」

なぜなら、今捨てたカードも手札に化けるのだから。

「どうする気だ？ 貴様の手札は残り二枚。すべて使っても、俺たちのカード全ては壊せんぞ？」

「いや、全部取巻のカードだろ。お前のカードは全部墓地だろうが」

「黙れ……！ チツ、口だけは達者だな。それで、どうする気だ？ また無駄に手札を消費するか？」

いや、生憎とその心配はない。

「これは、心配いらなかな？」

この後に起きる事態が解っているんだろう。葵が俺と同じ考えを呟く。

「ええっ、何言ってるんスか葵さん！？ もう、獅音君の手札は二枚しかないんスよ!？」

「たしかに、厳しいわね」

しかし、この後に何が起きるか解っていない翔と明日香は疑問を口にする。

まあ、当然だろう。俺だって、この状況を傍から見たら同じようなことを言っかもしれん。

だが、このデッキなら話は別だ。

「なあ、十代」

そこで、ふと気になった。

「ん？ なんだよ獅音？」

「お前は、この状況が不安か？」

十代は、この状況をどう感じているのか、と。

俺の手札のほとんどを使い切り、何も破壊できていないこの状況を。

「そんなの、決まってるじゃねえか」

何を聞くのだろうか？

そんなことを言いたげな、あっけにとられた表情で十代が言う。

「俺は」

彼が口にするのは、失望だろうか？ それとも、落胆だろうか？

「不安だぜ……」

……獅音がここでケリを着けて、俺の見せ場がなくなるんじゃないか、ってな！！」

二カッ、と。

最高の笑顔で、十代はそう言った。

「……そうか」

十代の答えを聞いて思わず、溜息を吐きそうになる

まったく、こいつは……俺のカードの効果も知らないのに、この状況でこんなことを言えるのか。ポジティブ過ぎる。

本当に、何というか……。

「……いい答えだぜ、十代！」

お前は、良いパートナーだよ。

「よく見とけ十代！！ ここからが、このデッキの真骨頂だ！」

「おうっ、楽しみだぜ！」

「ふんっ、何を言うかと思えば……手札二枚でギャンブルか？」

対面から万丈目の嫌味が聞こえてくる。だが、関係ない。

今の俺は、最高にハイだぜ！！

「そんな暴挙にはでねえよ！俺は、墓地の『ジエムナイト・フュージョン』の効果を発動！墓地に存在する『ジエムナイト』と名のついたモンスターを除外することで、このカードを手札に加えるー！！」

「なっ……墓地で効果を発動するだー！？」

「それも、回収効果……なるほどね。たしかに、心配はいらなそうだわ」

そう、これこそが『ジエムナイト』最大の強み。自己回収効果を持った『ジエムナイト・フュージョン』による手札の確保。

本来ならば、ここから連続融合に繋ぐんだが……生憎とエクストラデッキがないため、こんな戦い方になるわけだ。もつとも、これも立派な戦術だが。

「俺は墓地の『ジエムナイト・オブシディア』を除外して、『ジエムナイト・フュージョン』を回収する！そして、手札を捨てて『スナイプストーカー』の効果を発動！対象はサファイアドラゴン！」

三度回転するサイコロ。出た目は……。

「Yeah!! 出た目は3! よってサファイアドラゴンは破壊だ! さらに、対象不在となったデーモンの斧も破壊される!」

スナイプストーカーの銃が放つ、謎の光線によって破壊されるサファイアドラゴン。しかしサイコロが当たらないと発射しないって、あの銃どんな仕組みなんだ?

「くそ、だがまだ……」

「俺は、墓地の『ジェムナイト・ガネット』を除外して再び『ジェムナイト・フュージョン』を回収する!」

「なんだと!? そんなモンスター、貴様の墓地には……手札抹殺か!!」

「That's right!! 俺は、四度目の『スナイプストーカー』の効果を発動! 対象は、右側のセットカード!」

出た目は……5!

「よって効果発動! セットカードを破壊!」

「ああっ……ミラーフォースが!?!」

破壊されたのがショックだったのか、思わずといった様子で悲鳴を上げる取巻。

ミラーフォって……本当に、コイツの方がやばいんじゃないだろうか?

「俺は、墓地の『ジェムナイト・ルマリ』を除外して、さらに『ジェムナイト・フュージョン』を回収！ 手札を一枚捨て、効果発動！ 対象は、そのセットカード！」

「うっ……効果にチェインして、リバースカードオープン！ 『威嚇する咆哮』！ このターン、相手は攻撃宣言ができない！」

「チツ……仕留め損ねたか」

ミラフォと威嚇を同時に伏せるとは、用心深い奴だ。

「俺はカードを二枚セットし、ターンエンド！」

十代・獅音 LP 5300

手札 十代/獅音 2枚/0枚

モンスター 『スナイプストーカー』 『ジェムナイト・アンバ

ー

魔法・罫 3枚

「どうやら、見せ場が回りそうだぜ十代」

「へへっ、任せとけ！」

さあ、邪魔なカードは粗方掃除した。俺の仕事は、あとほんの少し。

「くっ……俺のターン、ドロ！ 俺は手札より『団結の力』をミラージユドラゴンに装備する！」

『ミラージユ・ドラゴン』



ATK / DEF 1600 / 600 2400 / 1400

「さらにミラージドラゴンを生贄にし、このカード以外の手札を全て墓地へ捨てモンスターを召喚する！ 来い、『炎獄魔人ヘル・バーナー』！！」

莫大なコストと引き換えに、異形のモンスターが召喚される。

六本の足に鋭い爪、棘の生えた身体、大きく開いた口。その顔に目は存在せず、不気味としか言えない。

『炎獄魔人ヘル・バーナー』

レベル6 炎属性 悪魔族 ATK / DEF 2800 / 1800

おいおい……ここにきて、とんでもないのを召喚したな。

「このカードは、こいつを除くすべての手札を墓地に捨て、攻撃力2000以上のモンスターを生贄にしなければ召喚できない！そして、こいつの攻撃力は相手フィールド上のモンスター一体につき、200ポイントアップする！」

俺たちの場にはモンスターが二体。よって、攻撃力は……

『炎獄魔人ヘル・バーナー』

ATK / DEF 2800 / 1800 3200 / 1800

「攻撃力3200!? 無茶苦茶ツス！」

「あれだけのコストを払ったのなら妥当……いえ、正直もつと強くて面白いんじゃないかしら」

「明日香……人の切り札にその言い方は……。否定できないけど」

「いや、あの……。二人とも、ホント冷静っすよね……。攻撃力が3000超えてるんスよ？」

「最低でも、破壊耐性くらいは欲しいわね。それでも使わないと思うけど……」

「世の中には、『スキドレバルバ』というデッキがあっつてね……」

後ろでヒソヒソと交わされる会話。ヒソヒソと言いつつ、まる聞こえだが。

……えっと。

「なんかシビアな評価されてるぞ、鳥頭」

「やかましいー!」

「まあ、その……。なんだ。がんばれよ?」

「貴様に同情なんぞされたくないわ!」

いや、だって切り札出してこの反応は……。切ない。

まあ、俺も明日香や葵に全面的に同意なんだが。スキドレバルバは、こいつの50倍は強いと思う。

「とにかく、バトルだ! その目ざわりなモンスターに消えてもらおう、俺はスナイプスターカーに攻撃! やれ、ヘル・バーナー!」

「む……」

俺の場には三枚の伏せカード。それを恐れずにくるとは、たいした度胸だ。もつとも、ここで攻撃しなければ、どうせスナイプストーカーに破壊されるからな。

そして、スマン。守ってやれんのだ、スナイプストーカー。

『ああ、俺って基本使い捨てつすもんね』みたいな表情で破壊されるスナイプストーカー。その姿に、非常に哀愁を感じた。マジでごめんなさい。

十代・獅音 LP 5300 3600

「だが、俺たちのモンスターが減ったことで、そいつの攻撃力は下がる」

『炎獄魔人ヘル・バーナー』  
ATK/DEF 3200/1800 3000/1800

「ふん、それがどうした！ 貴様らを倒すには十分だ！！ 俺はこれでターンエンド！」

万丈目・取巻 LP 4400  
手札 万丈目/取巻 0枚/1枚  
モンスター 『炎獄魔人ヘル・バーナー』  
魔法・罠 0枚

さて、ライフを逆転されたうえに、相手の場には切り札か。これは、もう……。

「見せ場が回ってきたぞ、十代!!」

主人公の出番だぜ!!

「おうっ！ 俺のターン、ドロー!!」

勢いよくカードを引く十代。手札は三枚、墓地はそれなりに肥えている。こいつなら、これで十分動ける筈だ。

「俺は手札から、『E・HERO エアーマン』を召喚するぜ！」

『E・HERO エアーマン』

レベル4 風属性 戦士族 ATK/DEF 1800/300

ちょっと待て、なぜそいつがいる？

「エアーマンの効果発動！ このカードが召喚、特殊召喚に成功したとき、デッキから『HERO』と名のついたカードを手札に加えることができる！ 俺はデッキから『E・HERO オーシャン』を手札に加えるぜ！」

オーシャンもいるのか！？ まさか、この十代のデッキは漫画とアニメの混成HERO!?

「いくぜ!! 俺は『融合』を発動！ 手札の『E・HERO オーシャン』と『E・HERO フォレストマン』を融合し、現れる!!」

だとすれば、この融合素材から呼び出されるHEROは……!!

今、わかった。

十代が、フレイム・ウィングマンを召喚したときに感じた違和感の、その正体。

もっと早く気付くべきだった。十代の切り札が別にあること。なぜなら、あいつはフレイム・ウィングマンの召喚時

「マイ・フェイバリット・ヒーロー」

このセリフを言わなかったのだから！

「『E・HERO ジ・アース』！！」

大地の割れる音とともに、十代の切り札が降臨する。

シンプルな外見に、途轍もない力強さを内包するヒーロー。それが……。

ジ・アース  
地球……！！

『E・HERO ジ・アース』

レベル 8 地属性 戦士族 ATK/DEF 2500/2000

「馬鹿な……プラネットシリーズだと……！？」

信じられない、という表情の万丈目。

この反応、どうやらプラネットは漫画版と同じくとんでもないレアカードのようだ。

「あれは、世界に一枚ずつしか存在しないプラネットシリーズ…  
…なんでアニキが!?!」

「とんだ隠し玉ね……」

「驚いたなあ……（漫画版まで絡んでくるとはね）」

若干一名、驚きの理由が違うことにはつつこまんぞ。

「へへっ、こいつが俺の切り札だぜ、獅音!」

「はっ、カツコイイじゃねえか!」

「だろ!! 獅音ならわかってくれると思ったぜ!」

嬉しそうな顔で、そう言う十代。やっぱり切り札を褒められると嬉しいよな。

「く……プラネットシリーズには驚いたが、状況は変わらん!!  
そいつでは今のヘル・バーナーは超えられん!!」

『炎獄魔人ヘル・バーナー』

ATK / DEF    3000 / 1800                    3400 / 1800

そう、万丈目の言うとおり今のままでは越えられない。  
今のままでは、な。

「それはどうかな?」

十代が、万丈目へと言葉を発する。

その台詞は、あまたのピンチにおいて主人公が紡いだ言葉。

すなわち……逆転フラグ!!

「なに？」

「俺は、ジ・アースの効果を発動！ フィールド上に表側表示で存在する『E・HERO』と名のつくモンスター一体をリリースすることで、このカードの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで、リリースしたモンスターの攻撃力分アップする！」

「なんだと!?!」

「俺は」

「ストップだ、十代」

「獅音？」

俺の制止に、首を傾げて返事をする十代。

たしかに、このままいけばヘル・バーナーは倒せる。だが、少し足りない。

「どうせやるなら、派手にいけや!! 俺はリバースカード『リビングゲッドの呼び声』を発動！ 墓地から『E・HERO エッジマン』を特殊召喚する！」

『E・HERO エッジマン』

レベル7 地属性 戦士族 ATK/DEF 2600/1800

そう。どうせなら攻撃力5000くらいは、いつてみようか！

「くそ、そいつも手札抹殺のときに……」

あるいは、カードガンナーかもな。今となつては関係ないことだ。

「使え、十代！」

「サンキュー、獅音！俺は、ジ・アースの効果でエツジマンを  
リリース！ジ・アースマクマ地球灼熱！！」

ジ・アースの体色が変化していき、両手に剣が現れる。これが、  
こいつの本気モードか。

『E・HERO ジ・アース』  
ATK/DEF 2500/2000      5100/2000

「攻撃力5100だとお！？」

「す、すごいッス！！」

「いくぜ、バトルだ！俺は、ジ・アースでヘル・バーナーに攻  
撃！アースマクマ・スラッシュ地球灼熱斬！！」

一閃。

まさに、そんな言葉がふさわしいだろう。ジ・アースが剣を振り、  
気がつけばヘル・バーナーは破壊されていた。

万丈目・取巻    LP    4400      2700



「さらに、『ジエムナイト・アンバー』でダイレクトアタック！」

万丈目・取巻    LP    2700                    1100

「くそ、だがまだ……」

この期に及んで諦めた様子のない万丈目。その意思是立派。だが、今のお前じゃダメなんだよ。

「いや、このターンで終わりだ」

だから、今回はここで幕引きだ。

「なんだと!?!」

「リバースカード、『ジエム・エンハンス』！ 自分フィールド上の『ジエムナイト』をリリースし、墓地の『ジエムナイト』を特殊召喚する！ 俺は『ジエムナイト・アンバー』をリリースし、『ジエムナイト・クリスタ』を特殊召喚!!」

『ジエムナイト・クリスタ』

レベル7    地属性    岩石族    ATK/DEF    2450/1950

「俺にも最後まで見せ場が欲しかったんで……」

「ちえー、最後は獅音が持っていくのかよ！」

「馬鹿な……この俺が、オシリスレッドのクズなんか……!?!」

「とりあえず、その偏見は捨ててこい。いけ、十代！」

「おう！ 俺は『ジエムナイト・クリスタ』で、ダイレクトアタック！！ これで終わりだ！！」

「馬鹿なあああああ！！」

万丈目・取巻 LP 1100 - 1350

Win 十代・獅音

「ガッチャ！ 楽しいデュエルだったぜ！」

勝利した十代が、右手をつきだしてお決まりのセリフを言う。

おお、生で聴けたぜ！ 十代の決めゼリフ！

「馬鹿な……この俺が……」

一方、茫然自失といった様子の方丈目。馬鹿にしていたオシリスレッドに敗北したのが、よほどショックだったらしいな。

まあ自業自得だし、慰める気はないが……発破くらいはかけてやるか。

「いいか、ま「いけない、ガードマンが来るわ！」「ここにきて空気を読まない登場！？」」

チクショウ、人が似合わない真似しようとしたのに！？ あれか。

俺にはカッコつけんな、つてことか!?

「ほら、早く逃げるよ獅音君!」

「いや、なんか色々釈然としないんだが!? せめて一言くらい  
……」

「……入学早々処分を受けたいの?」

「早く行くぞ、十代!! 翔も急げ!」

「「変わり身早っ!!」」

つたりまえだ! 俺は、面倒事は大つきらいなんだよ!

そんなわけで、俺たちは速攻でこの場から離脱した。万丈目達は  
……まあ、大丈夫だろ。

「ここまですれば大丈夫ね」

「まったく、勘弁してほしいな……」

全力疾走は、さすがにキツイぞ。

「獅音、ゼエゼエ言ってるけど大丈夫か？」

「意外と体力ないんスね」

「悪かったな……ハア……」

持久力のなさに定評のある、俺。

「そんなことより、二人に訊きたいことがあるわ」

「おま、バツサリ切り捨てるな……そんなに、俺はどうでもいいか」

「明日香は結構クールだからね」

にしても冷たい。ちょっと、へこむ。

「アナタ達……あのカードはどこで手に入れたの？」

「あ、それ僕も気になってたつす。『ジェムナイト』なんて聞いたことないし、アニキのプラネットだって世界に一枚のレアカードつすよ？ 二人とも、どこでそんなカードを……」

「よしっ、帰るか十代！ もう寝る時間だ！」

「お、おう。そうだな！ 早く戻ろうぜ！」

「ちよ、二人とも！？ 話の逸らし方が雑！ ……え、ちよつと本当に帰るの！？」

葵の声を背に、走り出す俺と十代。すまん、『ジエムナイト』がそんな珍しいカードとは思わなかった。説明するのが正直めんどい。

「ちよつと！ あなた、『説明はあとでしてやる』って言ってたじゃない！」

「忘れた！！」

「『言い切った！？』」

いや、嘘だけど。

「今日は遅いからな。また縁があつたら、そんなときにでも説明してやる！」

「じゃーな、明日香に葵！！ 今度会つたら、デュエルしようぜ！」

「ちよ、二人とも待つてほしいっす！ あ、葵さんと明日香さん、サヨナラっす！」

「待ちなさい、アナタ達！」

「明日香、言うだけ無駄だよ……特に獅音君は」

失礼なことを言われた気がするが、聞き流して俺たちは走る。

まったく、初日から面倒事に巻き込まれるとは……いや、今回は自分で首を突っ込んだから仕方ないけど。それにしても……。

(ガードマンの来るタイミングが、原作とは違ったな。デュエルにしたって、本来ならここで決着はつかなかったはずだが……これも歪みってやつの影響か?)

やはり、原作通りなんて甘い展開はそうそうないようだ。これからは、原作知識を当てにして下手に首を突っ込むのは控えよう。

(十代のデッキも違うしな……あれ? そういや、こいつのプラネットはどこで手に入れたんだ?)

さつき明日香に訊かれたとき、こいつも答え辛そうな顔をしていた。だから、俺のセリフにのっかって帰ることにしたんだろう。

やはり、響紅葉か? だが……。

「なあ、獅音」

「? なんだ、十代」

話しかけてきた十代の声に、思考が途切れる。いったいなんだ?

「これから、よろしくな!」

そう言って、笑う十代。その言葉に少し驚いて、納得する。

……そういえば、ここにきてからまだ、挨拶もろくにしてなかったな。

問題も、疑問もたくさんある。今日だって、早速色々と禍根を残したかもしれないし、面倒くさいことこの上ない。

だが、ひとまずは詮索も悲嘆も止めましょう。

「……こつちこそ、よろしく頼む」

俺の言葉を聞いた十代の顔には、やはり笑顔。

「ちよつと、僕もいるツスよ！」という翔の声を背に受けながら、真夜中の道を俺たちは走って行く。

そう、ひとまずは。

こいつ等のいる愉快な生活を楽しんでみても、文句は言われないだろっ？

ちなみに。

ここ数日何も口にしていなかった上に、突然の全力疾走をした俺は、翌日空腹と筋肉痛で死にそうになりながら目を覚ましたのだった。



第4話 傲岸不遜！！ 輝く宝玉、十代の切り札！（後書き）

第4話でした、更新遅くてスイマセン。

獅音「謝るのが板についてきたな」

いや、実際弁明できないくらい、更新が遅いからね……読者さんが離れたらどうしようと思いつつ、課題を終わらせないと書けないし。

葵「まあ、留年されても困るしね」

なので、春休みに入るまではこんなペースになりそうです。まことに申し訳ない。

獅音「よその更新ペースをちょっとは見習えよ。じゃあ、ひとまず内容についてだが……また伏線っぽいものをバラまいたな」

葵「おかげで、第4話にして過去最長記録だね。まさか、このデユエルがこんなに長くなるなんて……」

ねえ……作者も吃驚。

獅音「会話多すぎだろ。心理フェイズももつと減らせ」

そこは譲れない！ 俺は、無駄な会話に命を賭ける男！

葵「いや、そこは読者さんの意見を聞きなよ……会話いらない、って言われたらどうするの？」

善処します！

獅音「便利な言葉だな、それ……あと、俺のデッキだが、なんでここで新デッキ？」

悪魔だけじゃつまんないかなと思ってね。ジェムナイト、面白くない？

獅音「融合体がいれば、もっと面白かった……タイトルの輝く宝玉は、こいつらのことか？」

そうです。融合体を出さなかったのは、たまにはこんな残念な目にあう主人公もいていいかと思ったので。

葵「世の中、最初から全てのカードを所持してる主人公もいるのに、この扱いは悲惨だね……」

獅音「しかも実際に輝いたのは、ジェムよりもスナイプストーリーカ！っていうな」

実際、やられると腹立つよ。この動き。

葵「主人公にそれをやらせるって、どうなの？」

いろんな意味で、変わった主人公にしたいと思うんだ！！

獅音「そうか、掬じり切るぞ？」

作者にこんなこと言う時点で、かなり変わってるよね！？

葵「自分のせいでしょう……そういえば、明日香が冷静過ぎない？」  
それについては、次回で説明します。

獅音「十代のデッキに関しては、どうなんだ？」

基本的には、時空の歪みという解釈でOKです。詳しくは、本編で語られるでしょう。

獅音「いつちよまえに引っ張りやがって……まあ、内容についてはこんなものか」

葵「あ、もうひとつ。取巻君が普通に強かったのは？」

彼が強いんじゃない。初期万丈目のデッキが無茶苦茶すぎて、その対比で強く見えただけです。

獅音「リボンゾンビにヘル・バーナー使ってるからな……」

後々強化はするよ。サンダーになったところにも。

葵「まあ、妥当なところかな？ それでは、最後にお礼を！」

獅音「ここまで読んでくれたみなさん、ありがとう。本当に、待たせて申し訳ない」

葵「図々しいけど、気が向いたら感想を送ってくれると作者の励みになります！」

今後は、出来る限り返信もがんばりますので。

獅音「本編もな。それと一つだけ。カードの効果は、一々詳しく説明した方がいいか？ それとも、多少省略しても構わないだろうか？ もしよければ、意見を送ってくれると助かる」

葵「それでは。次回はようやくボクのデュエル！ テンションが上がる葵と！」

獅音「俺のキャラ、ぶれてないか？ ちょっと疑問な獅音がお送りしました」

葵・獅音「じゃあね〜!!」

獅音「タイトルの傲岸不遜は、俺のことじゃないだろうな……?」

葵「ア、アハハ……（どうしよう、否定できない）」

さて、葵のデッキどうしようか……? ?

葵「え、決まってないの!?!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3339w/>

---

遊戯王GX -the ultimate crisis-

2011年12月29日16時52分発行